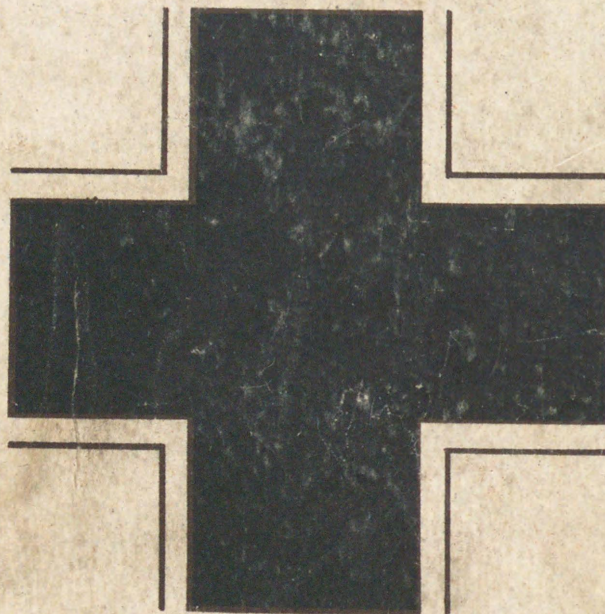


ツトラー

952

~~K~~  
15



大木雄二著











一与七



著 二 雄 木 大



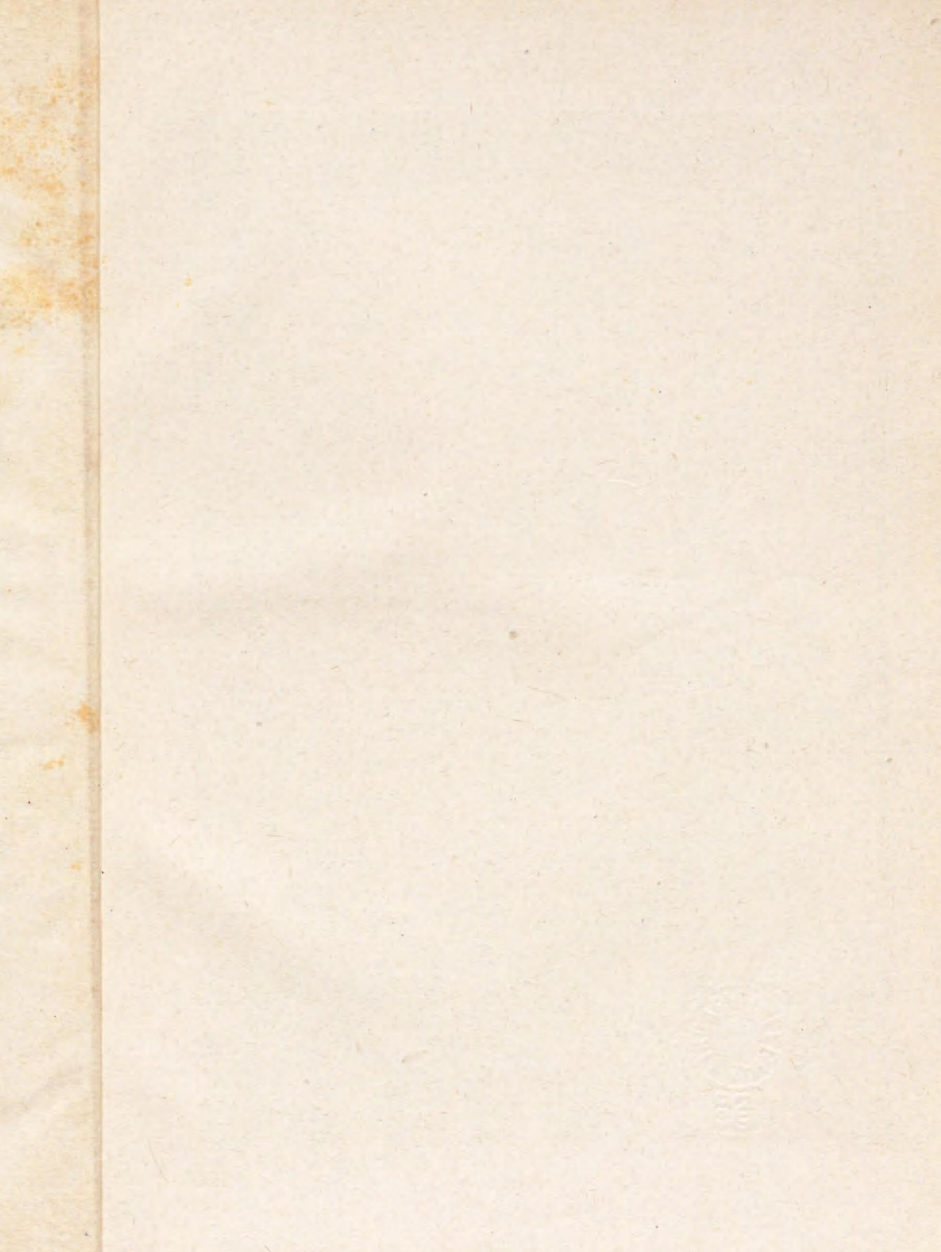






てりあに莊山







ーラトツヒ・フルドア

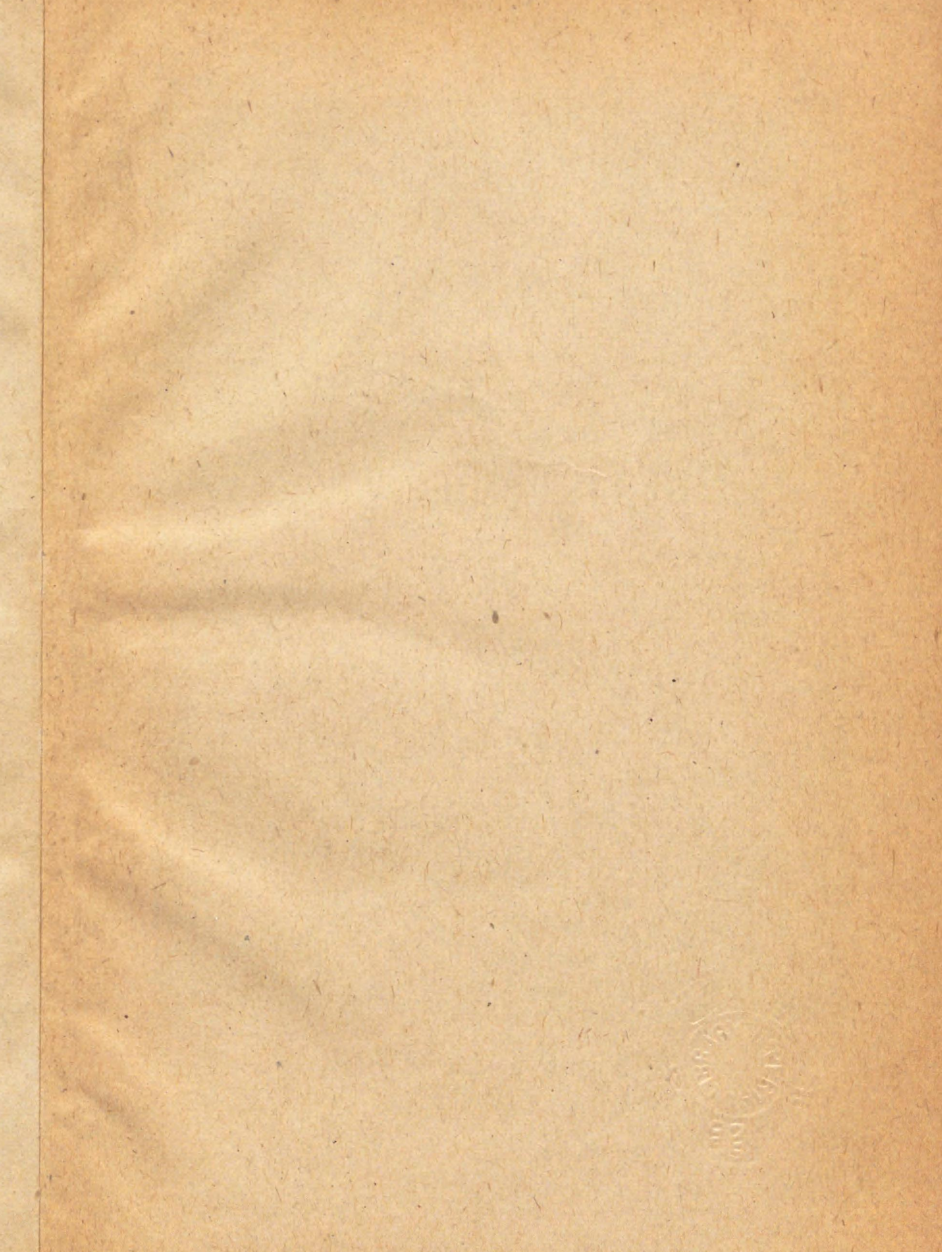






ーラトツヒ・フルドア





952

15

裝幀・挿畫

佐倉愛土



イ	ン	河	の	岸	邊	三
ド	イ	ツ	國	歌	一	三
卒	業	式	二	五	三	五
畫	家	に	な	る	ゆ	め
ま	じ	め	な	見	習	工
ウ	キ	ン	よ	さ	ら	ば
大	き	な	手	六	三	二
毒	ガ	ス	六	九	六	九
赤	旗	行	列	八	九	八



鼠ねずみとパン……九九

六人クラブ………二〇

ナチスの旗………二〇

[illegible][illegible]

ヒツトラーあらし ……一六三

わが闘争………一七五

ドイツの夜明け……………一九四

ハイル・ヒットラー………ニ

[illegible]







しよ仲のーラトツヒ



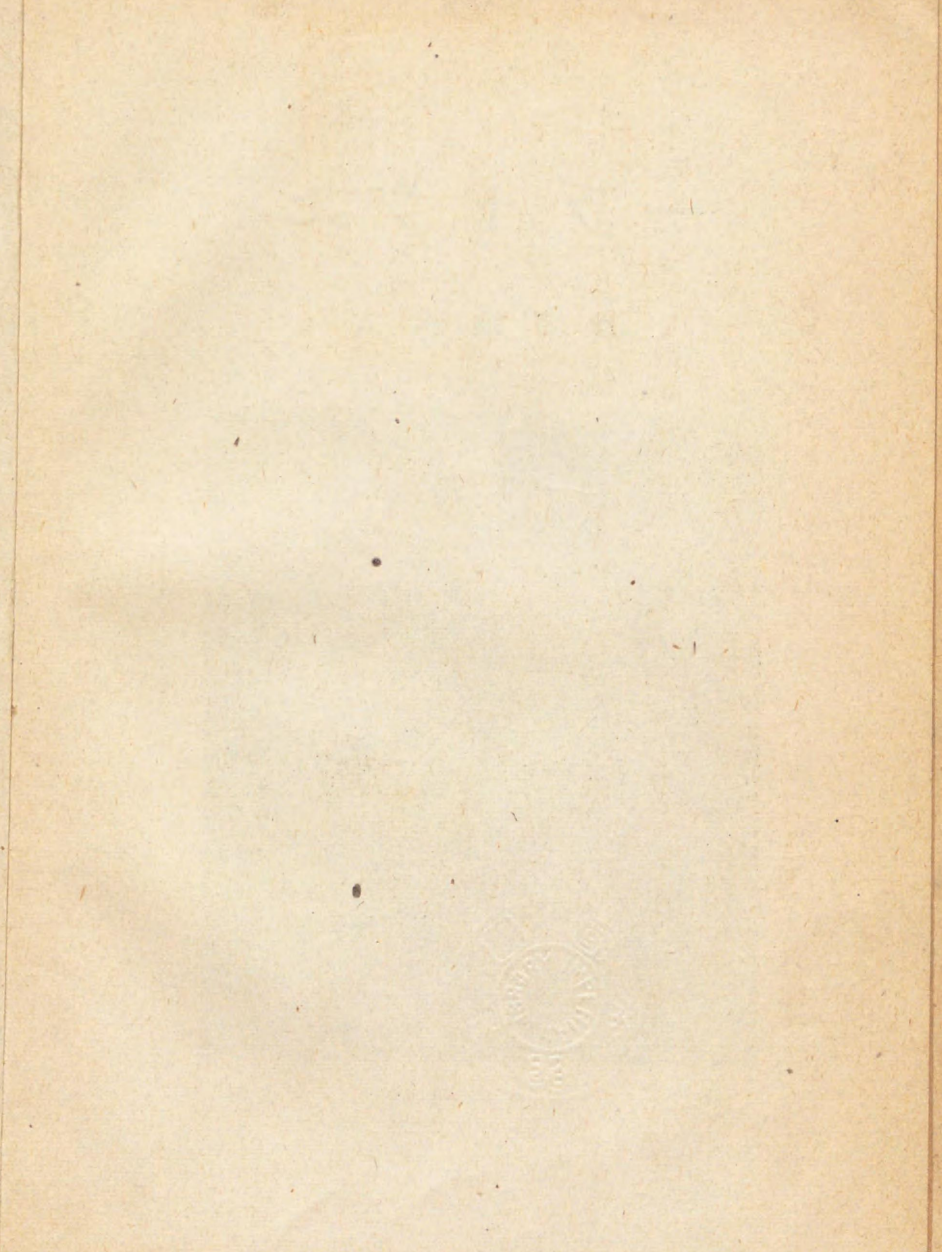


# ヒトラー

大木雄二 著







## イン河の岸邊<sup>きしべ</sup>

ドイツとオーストリアの國境<sup>こくまやう</sup>を流れてゐる河があります。イン河といつて、そのオーストリアがには、ブラウナウといふ小さな町があります。人口わづか五千人以上の、ひつそりした靜かな町です。

ブラウナウの町に、アロイス・ヒットラーといふ人が住んでゐました。アロイスは、町の税關<sup>ぜいぐわん</sup>につとめてゐる、眞面目<sup>まじめ</sup>で正直な役人でありまし

た。アロイスは、いかめしい口髭<sup>くちひげ</sup>をびんと立てて、めつたに笑つたこと

のないむづかしい顔をしてゐました。役所にゐるときも、町を歩くとき

も、いつもきちんとしてゐました。役人といふものは、人民<sup>じんみん</sup>の手本<sup>てほん</sup>にな

るやうに、眞面目でなければいけない、といつてゐるやうな顔であります。



した。

アロイスは、ある日、いつものむづかしい顔を、にこにこさせて、役所へ出ていきました。アロイスに、うれしくてたまらないことができたのでした。夜のあけがた、男の子が生れたのです。西暦一八八九年四月二十日のことで、イン河の岸の木の葉が、美しく輝く朝でありました。赤ん坊には、アドルフといふ名がつけられました。アドルフ・ヒットラーです。

『アドルフ。お前は、お父さんよりも、もつともつと偉い役人になるのだよ。』

生れたばかりのアドルフに、父のアロイスはかういふのでありまして。

アロイスは、田舎あなかのまづしい百姓の家に生れたため、ろくろく學校へもいくことができませんでした。役人になるためには、十七歳のときから、どんなにくるしい思ひをして、勉強したかしれません。アロイスは子供のアドルフには、自分のやうなくなるしい勉強をさせたくないと考えました。どんなに儉約けんやくしても、アドルフだけは學校へいれて、らくに勉強させ、りつばな役人にさせたいと思ひました。

イン河の向かふ岸に、ドイツ兵の練兵場れんべいぢやうがありました。練兵の銃の音がばんばんと、こちらがはのブラウナウまで聞えることがありました。兵隊の歌ふ、ドイツ國歌が聞えてくることもありました。

ドイツよ　ドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に



守るも攻むるも

手に手をとらば

マースの河から　メーメルまでも

エツチュの河から　ベルトの海まで

ドイツよドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に

ドイツ兵の聲は、天へもとどく勇しい聲でした。

ブラウナウの町の小學生になつたアドルフ・ヒットラーは、すぐにド

イツ國歌を覺えこんでしまひました。

ドイツよ　ドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に

ヒットラーは歌ひました。イン河の岸で遊んでゐるときにも、學校の行きかへりにも、ヒットラーは、思ひきり歌ひました。

ヒットラーは、ドイツが大好きでした。父のアロイスも、ドイツ人の子孫で、ドイツ語で話をする人でしたから、ヒットラーは、自分もドイツ人だと考へたのです。學校の先生も、ドイツはりつばな國だといふことを教へました。

「僕はドイツ人だ。」

ヒットラーは、かういふやうになりました。オーストリアが、ドイツと一つの國になつてしまへばよいと思ひました。ドイツ人の住んでゐる國が、みんな一つになれば、ドイツはヨーロッパで一番強い、一番りつばな國になれるのだ、かうも考へました。



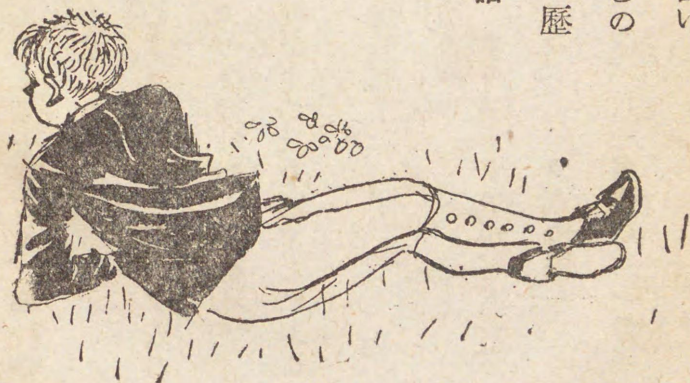
歴史の本には、ドイツのことがたくさん書いてあります。ヒットラーは、歴史の本を読むのが好きで、イン河の岸の原っぱへいつては、歴史の本を読みました。そして、友だちにも話してきかせました。

「普佛戦争はすごかつたのだぜ。」

ヒットラーは、普佛戦争のことを書

いた二冊の本を、草の上にひろげました。

「プロシヤとフランスと戦争したんだ。プロシヤはドイツの中の國



だよ。一八七〇年から翌年ま

でかかつた戦争だ。ナポレ

オン三世の大軍を、ビス

マルク將軍やモルトケ將

軍が、めちやめちやに破

つて、パリーまで、攻め

おとしてしまつたのだ。」

『えらいなあ。』

『えらいさ。ごらん、ここ

に、ビスマルク將軍の畫があ

るよ。』





ヒットラーは、頁<sup>ページ</sup>をめくつて、ビスマルクの畫を、友だちに見せました。モルトケ將軍の畫もありました。

「ドイツには、こんな強い、こんな偉い人がゐたんだ。いまにまた、ドイツには、ビスマルク將軍にもまけない偉い人が出るよ。」

さういふとき、ヒットラーの賢<sup>かしこ</sup>さうな目は、大きく見開かれます。そして額<sup>ひたひ</sup>にたれさがるやはらかい髪<sup>かみ</sup>の毛をかき上げ、希望<sup>きぼう</sup>に燃<sup>も</sup>える顔を、明<sup>あか</sup>るくかがやかせるのであります。

戦争ごつこをするとき、ヒットラーは、ビスマルクになつて、フランス兵になつた友だちを追ひかけました。また、ポーア戦争のまねをして遊ぶときには、アフリカ人になつて戦ひました。

ポーア戦争といふのは、イギリス人が、アフリカへ攻めこんで、ポー

ア人をいぢめようとしたとき、ボーア人が勇しくふせぎ戦つた戦争であります。

ヒットラーは、ボーア人になるのが好きでした。ヒットラーの友だちも、みんなイギリス兵になるのをいやがりました。そこで、隣<sup>とな</sup>り村の子供たちを呼んできて、イギリス兵になつてもらひました。

ヒットラーは、まつ先きに立つて戦ひました。

『弱い者いぢめのイギリス兵。慾<sup>よく</sup>ばりのイギリス。ドイツ人のボーア人は強いぞ、それつ。』

勇ましいヒットラーと友だちのボーア人は、隣り村の子供たちを、どしどし攻めました。隣り村のイギリス兵は、棒<sup>ぼう</sup>切れを投げ出して、自分の村へ逃げてしまひます。なかには、おいおい泣きながら走つて行く、



意氣<sup>い</sup>地<sup>ぢ</sup>なしのイギリス兵もあ

りました。

『萬歲。イ

ギリス兵

ぜんめつ

だ。』

ヒットラー

は、汗<sup>あせ</sup>をふきふ

き、心から嬉<sup>うれ</sup>しさ

うに、叫<sup>さけ</sup>ぶのであり

ました。



にくいイギリス。」

大切なドイツ。」

ヒットラーは

子供のとしか

ら、はつ

きりと

心にきめて

ゐたのであります。

## ドイツ国歌

ヒットラーが十二歳になったとき、父は、住み馴

五  
五  
五





れたブラウナウを引きあげ、リンツの町にうつりました。

リンツの町は、人口八萬もある大きな都會で、町はづれには、ダニユー河の大きな流れが、うねつてをりました。

町は、道はばがひろく、大きな建物たてものが、いくつもそびえてをりました。

學校、役所、教會けうかいなどです。

ヒットラーは、中學へ入學しました。

毎日學校へ通ふ道すぢに、教會がありました。灰色はひいろの壁かべをした、おご

そかな建物で、夕方は、そこからカーンカーンと、鐘かねの音が町にひびき

わたりました。長い上衣うはぎを着た僧院長そうりんちやうが、教會の門を、靜かに出てくる

ときのやうすは、神神かうがうしくすら見えました。

ヒットラーが、僧院長になりたいと考へたのは、そのころのことです。





『アドルフ。お前は、役人になるのだらうね。』

ある日、父がたづねました。

『……。』

ヒットラーは、だまつて、父の顔を見上げました。

『さうだらうね。』

父は、念を押すやうにいひました。

『お前も、もう中學生なのだから、目的をきめて勉強しなければいけない。偉い官吏くわんりになるには、心をしつかりしなくては駄目だめだからな。』

『お父さん。』

とつぜん、ヒットラーは、聲を高くしていひました。

『官吏はきらひです。僕はいやです。』

『官吏がきらひだつて？。ばかなッ。お父さんは官吏だ。お前に、そんなわがままはいはせない。』

『でも……。』

と、いつて、ヒットラーは、口ごもりました。何かいひたいのを、おさへてゐるやうです。

父はそれに氣づく、

『それとも、ほかに、なにか目的があるのか。官吏よりも、もつとよいことだと思ふやうなことが――。あるなら、いつてごらん。』

やさしくいひました。

『お父さん。僕は畫家えいがかになりたいのです。世の中の美しいものを、自由に描かいてみたいと思ひます。』



見る見るうちに、父の顔色がかはりました。やさしかつた目が、急にけはしく光りました。

「とんでもない。畫描<sup>ゑが</sup>きなんかになられてたまるものか。いけない、いけない。」

「でも、お父さん。僕は畫が好きなのです。畫家になるのは、りつばなことでないでせうか。」

「だめ。」

父は、手を横にふりました。

「畫描きだけは、何といつても、私がゆるさん。そんな考へは、今日かぎりすてなさい。」

父は、不機嫌<sup>ふきげん</sup>に口をつぐんでしまひました。

ヒットラーには、それでもとはいへません。小さくなつて父の前を下り、こつそりと、二階へ上つてしまひました。

二階といつても、ほんとの二階ではありません。屋根裏の、せまい暗い部屋です。部屋のすみには、古い道具がいつばい積んであり、そのそばに、ヒットラーの机と椅子とが置いてあります。そして、ぐるりにはヒットラーの描いた畫が、たくさんならべてありました。

青い空につぎでた、教會の尖塔の畫

ダニユーブ河にかけられた、ながい橋の畫。

茂つた青葉にかこまれた、赤い屋根の畫。

いろいろな畫が、ぎつしりあるのでした。どれも、畫の好きなヒットラーが、日曜ごとに出かけて、一生けんめいに、寫生したものばかりで



す。

中學でも、ヒットラーの畫は、評判ひやうばんでありました。圖畫の先生にもほめられるし、友だちからは、畫家になる方がよい、といはれるくらゐだつたのです。

『官吏くわんりになるのはいやだ。』

ヒットラーは、口のなかでいひました。心のなかでは、畫家になりたい、畫家になるのだ、といひました。

梯子段はしこだんに、足音あしおとがして、母の姿があらはれました。

『心配しないでいいのよ。』

母は、ヒットラーのそばへきて、額ひたひにたれさがつた髪を撫なでながら、かういひました。



五友也  
I



『お父さんのおつしやることに、さからつてはいけません。お前が、どうしても畫家になりたいなら、またあとで、お母さんから、お願ひしてあげますからね。』

「お母さん。僕、どうしても、畫家になりたいのです。」

「さう、もういいの。お母さんには、お前の心がよくわかつてゐます。さあ、アドルフ。」

母は、ヒツトラーの手をとりました。母と子は、だまつて御飯をたべてゐる父のそばへ、ならんで椅子いすにかけたのでありました。

ヒツトラーは、こんなに畫がすきてした。が、も一つすきな科目くもくがありました。それは歴史だつたのです。歴史を勉強すると、世の中の移りうつりや、進歩の順序じゆんぽが、よくわかるばかりでなく、人間の正しい生き方

がどういふものか、といふことを教へられます。ヒットラーは、歴史を讀むたびに、昔の偉い人の行ひに、心をうたれました、自分も、その人たちに負けないやうに、りつばな人になりたい、と考へるのでありました。

中學の歴史の先生に、レオポルト・ベツチ博士といふ先生がありました。この先生は、ビスマルクを尊敬そんけいしてゐて、いつも生徒に、ビスマルクの話をしました。ドイツのためにつくした、ビスマルクの功績こうせきを語るとき、ベツチ博士の言葉ははげしくなり、生徒たちの心を、ゆり動かすのでありました。

ベツチ博士は、ドイツとオーストリアの二つの國について、こんなふうに話すのでした。



「二つの國は、もともと一つの國でなければならぬのです。ドイツ人とオーストリア人は、同じ人種です。國が別別では、力が弱くなるばかりです。だから、一つにならなくてはいけないのです。」

ヒットラーは、ベツチ博士の教へを信じました。オーストリアは、ドイツと一つになり、同じ人種は同じ一つの國になつて、強い國をつくらなくてはいけない、と考へました。

ヒットラーばかりではありません、大勢の中學生も、同じやうに考へました。中學生ばかりではありません。リンツの町の青年たちは、ドイツとオーストリアが、一つの國になればよい、と考へてゐたのでありました。

ドイツときくだけで、少年たちの心はをどりました。青年たちの血は

湧きました。町では、どこへ行つても、若いものの歌ふ、ドイツ國歌が聞えてくるのでありました。

## 卒業式

ヒットラーと同じ考への中學生たちは、いつかヒットラーを中心にして、仲のよい仲間をつくりました。

『僕たちはドイツ人だ。』

この中學生たちは、みんなかういひました。

オーストリアは、もとドイツがつくつた國なのです。ですから中學生たちが、ドイツ人だといふのは、自分の國を大切にする心からだつたのです。ところが、これを知つた學校では、大へんびつくりしました。何



といつても、オーストリアはドイツとは別な國で、オーストリアの政府で治めてゐるのですから、ヒットラーのやうな生徒のゐることが、政府に知れては大へんです。

中學では、ヒットラーの仲間に、さういふ考へをしたり、いつたりしてはいけなと、ひどく叱りつけました。けれども、ヒットラーや友だちの心は、決して變りませんでした。學校でおさへつけようとすればするほど、なほさら、火のやうに燃え上るのでありました。

ドイツ國歌を歌つたばかりに、何時間も叱られた生徒がありました。ドイツをほめたために、學校から、にくまれるやうになつた生徒も、ありました。

さうしてもだめでした。生徒たちは、いよいよ、ドイツ好きになるば

かりです。

『學校で何といつても、先生がいけないと叱つても、僕たちの心はかはらないぞ。僕たちはゲルマン民族の一人として、大ドイツ國をつくり上げろのだ。』

生徒たちは、かういつて、たぎりたつた湯のやうに、いつか潰き出ようとしてをりました。

卒業式の日のことです。

學校を出て世の中へ送られる生徒。送る生徒。生徒たちの心は、何となく、いつもの日とちがつてをりました。先生のなかには、何かかはつたことが起りさうだぞ、と思つたものもありました。

ひろい講堂をうづめて、生徒たちは、おごそかな式を挙げました。校



長は壇<sup>だん</sup>に立つて、卒業生にむかつて、最後の訓辭<sup>くんじ</sup>をすませました。

つぎは、オーストリア國歌の合唱です。窓窓をふるはせるやうな聲で合唱がはじまつたとき、きふに、調子<sup>てうし</sup>のかはつた歌が、講堂のまんなかごろから起りました。

ドイツよ　ドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に

一きは高いドイツ國歌が聞えたのです。いままで、オーストリア國歌を合唱<sup>がっしや</sup>してゐた生徒たちは、思はず顔を見合せましたが、につこりうなづくと、たちまち、あちらにも、こちらにも、ドイツ國歌に合せて歌ふ聲が起りました。

「誰だつ。」

校長の、怒つた聲がしました。校長は歌をやめて、生徒たちを睨にらみまはしてゐましたが、

『こらつ。』

といふと、生徒の中へとびこんで行きました。

『やめるのだ、やめないか。』

校長は、一人の生徒にむかつて、まつかな顔をして、どなりつけました。

生徒は歌をやめません。だまつて校長の方を向いたきりです。

『ヒットラーだ。』

『負けるな、ヒットラー。』

生徒たちは口口にいひました。靴くつをカタカタ鳴らして、足ぶみをする



ものもありました。

はじめに、ドイツ國歌を歌つたのは、ヒットラーだつたのです。ヒットラーは、ほかの生徒が

騒ぎだしても、歌をや

めません。ぬつと立

つたまま、目を

する、顔を

あかくした

まま、やつぱ

り、歌ひつづけ

るのであります。



「まだやめないのか。」

校長は、たまりかね

たやうに、ヒツトラ

一の肩に、つかみ

かかりました。

「出たまへ。」

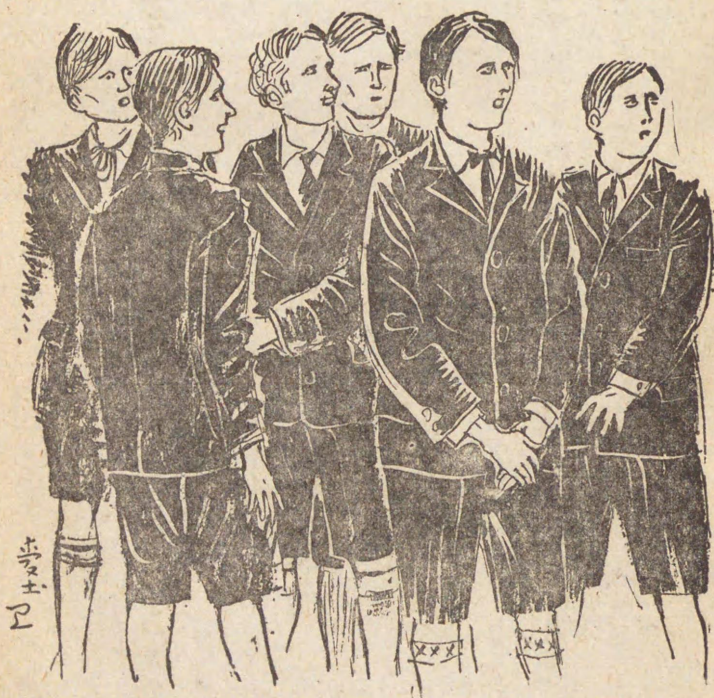
力まかせにつき

とばされて、ヒツ

トラは列をはな

れました。ヒツト

ラーはぐいと校長を





睨にらみました。

『出ます。』

そして、大股おほまたに講堂かうだうを出て行きました。すこしの悪びれたところさへありません。

『ヒットラー萬歳。』

たれかが叫びました。

『ヒットラー。』

『ヒットラー。』

講堂いつばいに、ヒットラーの名を呼ぶ聲。その聲は、窓のそとまで波のやうにひろがつて行きました。

## 畫家になるゆめ

父のアロイス・ヒットラーが死んだとき、ヒットラーは十三歳になつたばかりでした。税關ぜいぐわんの役人だつたアロイスには、あまり貯金ちよきんもしてなかつたので、母とヒットラーは、それまでよりも、もつと儉約けんやくに、つましく暮さなければなりませんでした。

母は、よその家からたのまれた賃仕事ちんしごとをして働き、ヒットラーを、中學に通はせつけました。

母は、ヒットラーの勉強ぶりを、氣をつけて、みてをりました。ヒットラーは、相變あひかはらず畫がすきで、家のなかには、スケッチや水彩畫すゐさいがわがふえて行くばかりです。その畫をながめて、母は、ほつとため息をつきま



した。

「お前、やつぱり畫家になる氣なのね。お父さんのおつしやつたやうに、役人にならうといふ心にはなれないの。」

母はいひました。

母のつかれた影が、壁に大きくうつつてをりました。ヒットラーは、畫筆を下において、母の顔を見上げました。

「そんなに畫家になりたいの。」

「はい。」

「さう。それなら畫家におなりなさい。お母さんは、お父さんのあとをついで、りつばな役人になつていただきましたかつたのだけれども、いやなことはしかたがありません。畫家になつて、りつばな畫を描いて下さい

よ。」

『すみません、お母さん。』

『いいのよ。お前が一人前の畫家になるまで、お母さんは、かうして、一生けんめい働きますすからね。』

母はよく働きました。夜おそく、ヒットラーが眠つたあとまで、すやすやといふいびきをききながら、母は働くのでありました。

二年ののち、ヒットラーが十五歳になつたとき、母は病氣になりました。働きすぎて、つかれが出たのでせうか。ヒットラーは、母のそばをはなれずに、心をこめて看病かんびやうをしました。

『美術學校の試験も、ちぎてしたね。』

母は、自分の病氣よりも、ヒットラーの試験を、しんばいしてゐたの





でした。

『しつかりやつていらつしやい。』

『ええ、大丈夫です。』

ヒットラーは、母をあんしんさせるために、力強いひみました。

美術學校は、ウヰンにありました。ウヰンは、オーストリアの首府でリンツの町とはくらべものにならぬほど、にぎやかな、大きな都會でありました。

ヒットラーは、大ぜいの志願者といつしよに試験を受けましたが、運わるく、その試験に、落第してしまひました。

ヒットラーはおどろきました。落第しようとは、夢にも思はなかつたのです。先生にも、友だちにもほめられた自分の畫が、そんなに下手だ

とは、考へてみたこともなかつたのです。

ヒットラーは、頭をたれて、しづみこんでしまひました。

（お母さんに、申しわけない。落第と知つたなら、お母さんは、どんなに力をお落しになるだらう。申しわけない……。お母さん。ごめんなさい。）

ヒットラーの兩眼からは、あつい涙がこぼれました。あとから、あとから、頬ほほをつたつてこぼれおちました。

考へれば考へるほど、残念でたまりませんでした。どうしても、あきらめることができないのです。

（何かのまちがひかもしれない。試験をした先生にあつて、きいてみよう。）



ヒットラーは、美術學校をたづねて行きました。先生は、すぐにあつてくれました。

『氣のどくだが、まちがひではない。もすこし畫を習つてから、もいちど試験にきてみたまへ。』

先生はいひました。

ヒットラーは、しばらく考へてをりましたが、

『先生。』

と、思ひきつたやうにいひました。

『私の畫は、だめなのでせうか。私は畫家になれるみこみがありませんか。』

『さあ……。』

先生は、ヒットラーの描いた畫を、じつとながめてゐましたが、やがて、につこり笑ひました。

「ほんたうのことをいへば、君は畫家よりも、建築家になるはうがよいのぢやないだらうか。この畫をみてゐると、建築家の描いた畫のやうな氣がするね。」

『でも先生、私は畫家になりたいのです。』

『なるほど。』

先生の目が、いたはり深く、ヒットラーをながめました。

『それなら、もつと勉強して、どこまでも畫家になるのもよいだらう。

しかし、人間には生れながらの才能さいのうといふものがある。君は、ものをうつす畫家よりも、新しいものをつくりだす才能があるやうに思はれる。



もいちど、よく考へなほしてみたまへ。』

先生はさういつて、机にむかつて書きものをはじめました。

ヒットラーは、すごすごと、美術學校の門を出ました。振りむいてみると、あちこちに二人三人、幸福さうな學生が、肩をならべて話しながら歩いてゐるのです。ヒットラーは、その學生たちを、うらやましく思ひました。

(みんなは、ああして、愉快に畫の勉強ができるのに、僕は、ああ、僕は……)

ヒットラーは、重い足を引きずつて、停車場へむかひました。

母のことが胸に浮びました。そして、胸をしめつけられるやうな氣がしました。いつそ、どこかへ行つてしまひたい、とさへ思ひました。

ヒットラーの乗つた汽車は、ウキンをはなれ、母のゐる町へむかつて走りました。ヒットラーの目には、母のやつれた顔が見え、汽車が進むにつれて、悲しくて、くやしくて、申しわけなくて、いまにも聲をあげて泣きだしたくなるのでありました。

家へついたヒットラーは、悪いことでもしたときのやうに、こつそりと、はいつて行きました。

『おや、お歸り。』

眠つてゐたらしい母は、ばつちりと目をあけましたが、元氣のないヒットラーのやうすを見ると、

『おつかれたつたらうね。』

やさしくいひました。



ヒットラーは、母のそばへよつて、

『お母さん。すみません。』

小さな聲でいひました。それだけいふと、涙がでてきて、目がぼうつとうるんでしまひました。

『いいのよ。試験がうまくいかなかつたのね。でも、しんばいしてはいけません。お前はまだ若いのだから。』

（やさしいお母さん。何もかもわかつて下さるお母さん。世界一よい、僕のお母さん——。）

ヒットラーは、涙がこみあげてきました。

ヒットラーは、この母のために、勉強して、りつばな人になつて、あんしんさせなければいけない、と思ひました。

(負けるものか。美術學校へはいれなければ、はいれなくてもよい。ひとりて勉強しても、きつと、りつばな畫家になつてみせるぞ。)

ヒットラーは、自分の心にむかつて、強いひきかせたのでありました。

## まじめな見習工<sup>みならひこ</sup>

ドイツの都ミュンヘンの町に、そぼそぼと小雨のふる夕がたでした。

いまついたばかりの汽車から、一人の少年がおりてきました。

少年はヒットラーでした。病氣の母が、とうとう死んだので、家財<sup>かさい</sup>を賣りはらひ、ただ一人、たよる人もないウヰンへ出てきたのであります。

父も母もない、みなし子のヒットラーは、その日から、自分で働いて



食べなければならなかつたのです。それには、大都會だいとくわいがよいと考へました。ミュンヘンへ出る決心をすると、大きなトランク一つを下げて、汽車にのりこんだのでした。

十五歳になつたばかりのヒットラーが、世の中へ、一人でとびこんで行かうといふのです。弱い心ではだめです。強くならなければいけません。強くなるぞ、といひながら、ヒットラーは、ぎゅつと肩を上げました。

ポケットには、五十グルデン（日本の金にして五十圓くらゐ）ありました。家財を賣つた金です。世の中へ出て行くための大切な金です。

雨はやみません。だんだんうす暗くなる町には、電燈がかがやきはじめました。

ヒットラーは、胸をはつて、元氣よく、雨の中を歩いて行きました。  
それから幾日かのちでした。ヒットラーの姿が、ある建築工場けんちくこうぢやうにあらはれました。

『僕を働かして下さい。』

ヒットラーは、係りの人にあつて、かうたのみました。

『働きたいといふのだね。だが、君は、どんな仕事ができるのかね。』

『何でもやります。でも、まだ働いたことがないのでから、これからおぼえるのです。』

『はははは。それぢや、何にもできないのと同じぢやないか。』

『いいえ、何でもやれます。一生けんめいにやれば、どんなことでもやれると思います。』



ヒットラーは、いひはりました。

『よしよし。君の元氣が氣にいつた。では當分たうぶんの間、見習工で働いてもらつて、仕事をおぼえたら、一人前の金をはらふとしよう。』

かういふ約束ができました。ヒットラーは、翌日から、大ぜいの人にまじつて工場へ通ふことになりました。見習工のことですから、給料きふれうはほんのわづかばかりでした。一人で食べるにも足りないくらゐです。ヒットラーは、服がやぶれても、新しい服が買へず、ほしい物も買へません。それでも、一生けんめいに働きました。そして、ひまなときには、好きな畫を描くかのを、何よりの樂しみにしてをりました。

（貧乏してもかまはない。苦しいのなんか、なんでもない。いまに、りっぱな畫家になるのだ。）

ヒットラーは、かう思つて、すこしも不平をいひません。仕事をいやだと思つたこともありません。毎日ねつしんに精出<sup>せいだ</sup>して、工場の仕事につとめてをりました。すると、ある日のことです。

晝の休みに、ヒットラーが、日蔭<sup>ひかげ</sup>で休んでゐるところへ、顔見知りの職工がきて、

「君に話があるのだがね、アドルフ。」  
と、話しかけました。

「何の話？」

ヒットラーは、きき返しました。

あまり話をしたこともないのに、何の用だらうと、をかしく思つたからです。



『君も、僕らの組合にはいらないか。それをすすめにきたのさ。』

職工は、さういつてから、ヒットラーとならんで、土の上に、腰をおろしました。



木  
下  
正

『ときに君は、マルクスを知つてゐるかい。』

『マルクスつてだれだい。』

『うん、ドイツ生れの大學者だよ。マルクスはね、働く仲間は、組合をつくつて、主人が無理をいつても、いふことをきくな、とかういふのだ。』





さうすれば、働く者は、くらしがらくになるといふのさ。うまい話ぢやないか。僕たちは、みんな組合にはいつたよ。君もはいつたはうがいい。だいいち、君はすこし働きすぎるからね。」

「何だつて。」

ヒットラーは、いひました。

「主人が、無理をいふなんてことがあるだらうか。僕は、この會社で、すこしも無理をいはれたことなんか無いよ。なんにも知らない僕に、仕事を覚えさせてくれるのにさ。働きすぎるどころか、なにもできないので、申しわけないと思つてゐるくらゐだ。」

「ふん。」

相手は、鼻でわらつて、

「それが、君の考へちがひだ。まあ、僕らの組合へはいつてみたまへ。

だんだん世の中のことかわかるから。」

そして、うすい小さな本を一冊、ヒットラーのポケットへねぢこむやうにして、あちらへいつてしまひました。

「へんな男だなあ。」

ヒットラーは、ひとりごとをいひました。

その晩、ヒットラーは、職工からもらつた本を、讀んでみました。そしてびつくりしました。その本には、働く者と主人とは敵だ、と書いてあるではありませんか。主人を憎め、ともあれば、仕事をなまけるやうに、とそんなことまで書いてあるのです。

ヒットラーは、一晩ぢゆう、ねむらずに考へてをりました。が、夜明



けになつて、やうやく、何もかもわかりました。

（これはユダヤ人のしわざだ。ユダヤ人は、主人と働く者との仲をわるくさせ、喧嘩けんかさせて、世の中を亂さうとしてゐるのだ。そして、そのすきにつけこんで、自分たちが、世の中を思ひ通りにしようとしてゐるのだ。みんなは、それに氣がつかないから、マルクスを信用してゐるが、こんなわるいことはない。マルクスの考へはまちがつてゐる。マルクス主義こそ、世の中をわるくする敵だ。働く者は、マルクス主義をうちやぶつて、りつばな國民にならなくてはいけないのだ。）

ヒットラーは、そこへ氣がつくと、拳こぶしを固めて、ぽんと胸をたたきました。胸のなかで、どつどつと血の流れる音が聞えました。赤い血です。マルクス主義者のやうな、にどつたきたならしい血ではありません。き

れいな、國を思ふ愛國者の熱い血であります。

夜が明けると、ヒットラーは、昨日よりも、もつと勇しい足どりで、工場へ出かけて行きました。晴れた大空の下に、元氣な愛國者の足音です。この足音は、どんな困難てんなんもつき破つて進む足音であります。

マルクス主義者を改心させて、よいりつばな職工にしたいと思ひました。どうしても改心しないならば、どこまでも争つて、正しい道を守らうと決心したのであります。

## ウヰン よさらば

工場へ行くと、昨日の職工がゐました。ヒットラーを見つけると、そばへ來て、



『あの本を読んだらうな。』

と、ききました。

『讀んだ。すっかり讀んだ。』

『さうか。では、君も、組合へはいる決心がついたらう。』

『いや。僕はいらないことにきめた。』

ヒットラーは、きつとして、いひました。

『すると、反對だといふのか。』

『さうだ。あんなことは、みんな嘘うそつばちだ。ユダヤ人のわる智慧ちゑだ。

あれは惡魔あくまの言葉だ。あんなばかなことをほんとにしてゐると、ユダヤ人のために、ひどい目にあはされるだけだ。』

『ばかつ。』

相手

は、おそ

ろしい顔で、

どなりま

した。

「アドル

フ。君は

仲間を、

裏切るつ

もりなのか。

そんなことをする



表土工



と承知しないぞ。』

『僕は、君たちの仲間ぢやない。君たちが、あの惡魔<sup>あくま</sup>みたいなユダヤ人の仲間なら、僕は名譽<sup>めいよ</sup>あるドイツ國民だ。君たちこそゆるしておかないぞ。』

『何つ、生意氣<sup>なまいき</sup>なつ。』

相手は拳<sup>こぶし</sup>をふり上げました。

ヒットラーも、相手につめよりました。ヒットラーの心は固<sup>かた</sup>いのです。おどかされたり、なぐられたくらゐで、すぐに變<sup>かわ</sup>るやうな、意氣地<sup>いきぢ</sup>なしではありません。

『どうした。なぐらないのか。』

拳をふり上げた相手の顔をにらんで、ヒットラーは、平氣でいひまし

た。

『覚えてをれ。』

拳をおろした相手は、うす氣味わるく、にやりと笑ひました。

『裏切者、お前を、この工場から追ひだしてやるぞ。』

さういつて、こそこそと、どこへか行つてしまひました。

ヒットラーは、そのときから、マルクス主義のあやまりと、ユダヤ人のおそろしいくらみを、會ふ人毎に話してきかせました。マルクス主義をやめて、ドイツ人はドイツ人のあつまつた、りつばな國をつくらなければいけない、と話しました。さういふときヒットラーの聲は、感激にふるへました。一言一言は、錐のやうにするどく、マルクス主義のまぢがひをさし通すのでした。けれども、職工たちは、まじめにとりあつ



てくれません。職工は、一人のこらずといふくらゐに、マルクス主義に心をうばはれてゐたのです。

（だめか。こんなに話してきかせても、みんなわるい夢からさめないのか。）

ヒットラーは、力をおとしましたが、たちまち思ひ直しました。

（こんなことで、負けてはいけない。元氣を出せ。そして、ドイツのため、世のために、マルクス主義と、どこまでも争へ。負けるな、ヒットラー。）

心のなかで叫んだのでありました。

ところが、幾日かのちのことです。ヒットラーは、いきなり會社をやめさせられてしまつたのです。わるいこともしないのに、何の落度もな

いのに、いきなりやめさせられてしまったのです。

ヒットラーには、そのわけがよくわかりました。マルクス主義の仲間  
に、憎にくまれたからです。組合にはいらなかつたので、こんなことになつ  
てしまつたのです。悪い仲間は、職工ばかりではなかつたのです。會社  
の上の方の人や、主人のそばについてゐる人のなかにも、大ぜいゐると  
いふことが、ヒットラーにはわかりました。

思つたよりも、敵は大ぜいでした。これでは、いくらヒットラー一人  
が、ぐわんばつても、勝てさうありません。

(よし。こんどは負けてやるが、あとでかならず勝つて、ユダヤ人の仲  
間をやつつけるぞ。)

ヒットラーは、ウヰンを去ることにきめました。すみなれた町ですが



すみたい町ではありません。

ヒットラーの行きたいのは、ドイツでありました。ドイツこそ、自分のすむところだと思つて、ながいことあこがれてゐたのであります。

（ドイツのどこへ行かう。）

ヒットラーは考へました。そして、ミュンヘンへ行くことにきめました。

ミュンヘンは、ドイツの古い都で、いちばんドイツの町らしい町だといはれてゐるところです。

さよなら、ウヰンよ。

ある日、ヒットラーは、ウヰンから、ミュンヘン行きの汽車に、のりこみました。ウヰンから、ミュンヘンまでは、汽車で八時間もかかるの

です。

ヒツト

ラーは、

がたん

がたん

と、ゆ

られな

から、目

を閉ちまし

た。そして、小

聲で歌ひました。





ドイツよ ドイツ すべての上に

世界をあげて すべての上に

守るも 攻むるも

手に手をとらば

マースの河から メーメルまでも

エツチュの河から ベルトの海まで

ドイツよ ドイツ すべての上に

世界をあげて すべての上に

## 大 き な 手

ミュンヘンの町は、両手をあげて、ヒットラーを迎へてゐるかのやう

でした。ヒットラーは、そのとき二十三歳。心にも身體にも、力のあふれた若者でありました。

アルプスの山山が、青い空につらなつてゐました。ミュンヘンの町は空と地とにいだかれて、おつとりと、大きな呼吸<sup>いき</sup>をつづけてゐます。うごいてゐる町。いきいきとした町です。

この町では、スラヴの言葉や、チェッコの言葉をきくやうなことはありませんでした。どこへ行つても、誰の話してゐる言葉も、はつきりしたドイツ語で、ヒットラーには、これが何よりもうれしかつたのです。

ドイツ語で話しあふドイツ人ばかりのなかに住みたいと、ヒットラーは、ずつと前から考へてゐたのです。ミュンヘンへ來て、はじめて、その望みがかなへられたのです。



ミュンヘンは、古い町だけに、有名な建築や彫刻<sup>てうてき</sup>などが、たくさんありました。畫の好きなヒットラーは、毎日町を歩いて、めづらしい畫を見たり、建築を見物したりして、いつかは、りつばな建築家になつて、大きな建物をつくりたいと考へました。

ヒットラーは、ペンキ職人の手つだひになつて、看板<sup>かんばん</sup>の畫や文字を描<sup>か</sup>きました。

『これはうまい。ただのペンキ屋さんにしては、腕<sup>うで</sup>がよすぎる。』

ヒットラーのかいた、ペンキ畫を見た人は、かういつてほめました。

ヒットラーは、一日も畫の勉強を休みません。河の岸や、原つばに、畫を描いてゐるヒットラーの姿<sup>すがた</sup>の见えない日はありませんでした。時には、小さい畫を、新聞社へおくつて、新聞にのせてもらつたことなども

あります。新聞にのれば、畫の代がとれるので、くらしの足しになつたからです。また、時には、町の畫商ぐわしやうの家へ、畫をもつて行つたこともありました。畫商といふのは、畫を賣る商人のことです。店みせさきには、いろいろな人の畫がならべてあります。有名な畫家のものも、名もない畫家のものも、たくさんかざつてあるのです。ヒットラーの畫も、そのなかにならべられたのでした。その畫が賣れると、ヒットラーは繪具えのぐを買つたり、オペラを見物したりしました。オペラといふのは、歌を歌ひながらする芝居しばゐで、ヒットラーは、畫のつぎには、オペラが好きだつたからであります。

いまでも、そのころのヒットラーの畫が、三十二枚も、ドイツのあるところに集めてあるといふことです。



「ヒットラーの畫は、あまりうまいとはいへない。けれども、きちやうめんで、すこしもごまかしがない。」

さういつた人があります。いかにもヒットラーの畫らしいではありませんか。

世界大戦のとき、ヒットラーは、ドイツ軍に加つて出征しました。戦地でも、ひまがあると畫を描いてゐたといひます。あるとき、手の相を見るお婆さんが、ヒットラーの手をみて、

「これはりつばな手だ。あなたは音楽家ですか、それとも畫家ですか。」  
といつたことがあります。

「畫家だ。」

と、ヒットラーが答へると、



馬六甲  
工



『さうですか。畫家ならば、景色をかかないで、人物をお描きなさい。かならず、えらい畫家になりますよ。』

お婆さんは、かういつたといふことであります。

ヒットラーの描いた畫は、たいてい景色です。人物はほとんどありません。ですから、もしヒットラーが、景色をかくのをやめて、人物を描いたなら、手相見のお婆さんがいつたやうに、すぐれた畫家になつてゐたかもしれません。けれども、ヒットラーは畫家にもならず、建築家にもなりません。ドイツを建て直した、國の建築家になりました。そして新しいヨーロッパを建て直さうとしてをります。

ヒットラーは、建築家をやめて、國を建て直す建築家にならなければならぬときが來たのです。ヨーロッパの空に、黒い雲がおしかぶさり

ドイツをつつんでしまつたからです。ヒットラーは、その雲をおしのけて、ドイツを明るい國にしようと、大きな手をひろげて、立ち上つたのでありました。

## 毒　　ガ　　ス

西暦一九一四年の夏、ヨーロッパをくつがへすやうな、おそろしいできごとが起りました。いいえ、世界中の國國が戦争をはじめたほどの大事件です。

オーストリアの皇太子と妃が、セルビア人に、ピストルで撃たれたのです。うつたのは若い學生でした。そのころ、この二つの國の間には、めんだうなもめごとが起つて、なかなか話し合ひがつかなくつたところ



でしたから、この事件があると、二つの國は、まもなく戦争をはじめてしまつたのです。

ドイツとオーストリアとは、同盟國どうめいこくでした。オーストリアが戦争をはじめれば、ドイツはオーストリアを助けなければなりません。セルビアには、ロシヤ、フランス、イギリスといふ味方があります。ですから、オーストリアとセルビアの戦争は、かういふたくさんの國の戦争になるのでした。

七月二十八日。つひに、オーストリアは、セルビアに宣戰せんせんしました。するとその三十日には、たちまちロシヤの大軍が、セルビアを助けにくり出しました。

ドイツもじつとしてはゐられません。國中に、オーストリアを助ける

といふ聲が潮のやうに高くなりました。政府も同じ考へてした。ドイツの國中へ、召集命がとびました。若者たちはまたたくまに兵營に集り、兵營からは、銃をになつた兵隊が、足音たかく戦地へおくられて行きました。

静かだつたミュンヘンの町も、あらい息づかひをはじめました。兵隊の列は、町をうめつくして、ライン河方面へ、オデル河方面へと、戦線目ざして進軍です。汽車もトラックも、兵隊でいっぱいになりました。馬のいななき、砲車のひびき。町は、朝も晩もない、騒騒しさでありました。

ヒットラーは、このやうすを見ると、もう畫を描く氣にもなれません。オペラ見物どころではありません。



（行かう。戦線へ行かう。ドイツのために、この身體をささげるときがきた。）

ヒットラーは、かう心をきめました。心をきめれば、ぐづぐづしてゐることのきらひなヒットラーです。すぐに志願兵しごんへいになる願書を書いて、軍隊へとどけました。

（ゆるしてくれるだらうか。それとも……）

ヒットラーはしんばいでたまりませんでした。オーストリアで生れたのですから、ひよつとしたら、ドイツ人ではないといつて、志願兵をゆるされないのではないか。かうしんばいしたのでありました。

しかし、そんなしんばいはいらなかつたのです。ヒットラーは、志願兵になることをゆるされたのです。

『ハイル。』（萬歳といふこと）

思はず、ヒットラーは叫びました。

八月のある暑い日です。ヒットラーは、はじめて軍服を着ることができました。よく手入れのとどいた鐵砲を、もつこともできました。

さあ戦地へ行くのだ！

が、出發の命令は、なかなか出ませんでした。はじめて軍服をきた兵隊を、いきなり戦地へおくことはできません。その前に、みつちりと兵隊のすることを教へるのです。教練けうれんです。兵營へいえいでは、はげしい教練がつづけられました。ヒットラーは、教練をうけながらも、早く戦線へ出たいと、そればかり考へました。教練をうけてゐるうちに、戦争がおしまひになりはしないかと、しんばいになりました。このときの戦争は、



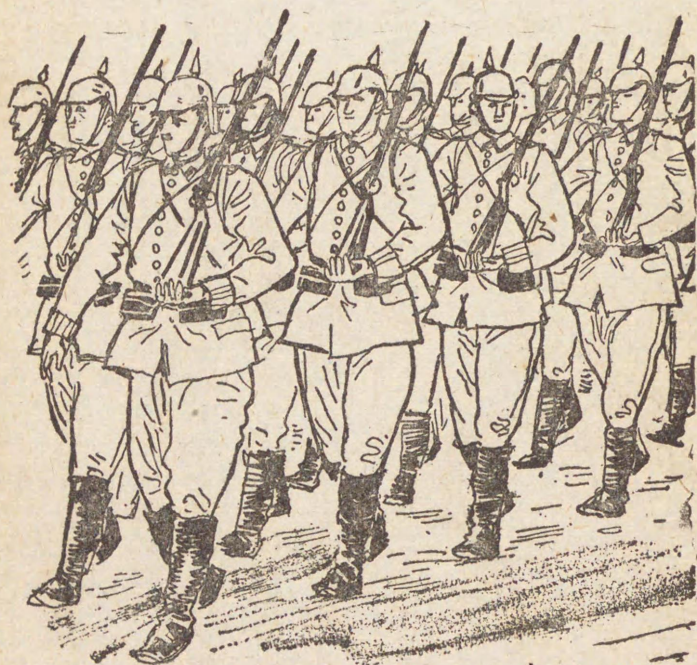
四年もつづいたのですが、戦争のはじめには、そんなに長くつづくとはたれも考へてゐなかつたのであります。それは、ドイツがぢきに負けるだらうと、世界の

國國の人が考へたからです。ところが、ドイツは大へん強かつたので、とうとう四年もつづいたのであります。

ドイツでも、戦



争はすぐをはるだらう、と考へてをりました。ドイツでは、敵はすぐに負かしてしまへると思つてゐたからです。兩方とも、考へちがひをしてゐたために、大へん苦しい戦争をしたわけであります。





ヒットラーの、待ちに待った日がきました。ヒットラーのはいつてゐたバヴァリア聯隊れんたいに、出動の命令が下つたのです。ミュンヘンをあとにして、ヒットラーらの軍隊は、西へ西へと進軍しました。

夏の陽ひに、ライン河の水が、ざらざらと照りかへしてをりました。軍隊は進みに進みました。フランダースを進軍するころ、ばらばらと雨が降つてきました。

うす墨すみをながしたやうな空です。遠くでは雷がなり、いなづまが、きらつと光ります。一晩歩いて、夜明けが近づいたころでした。夏でも、夜明けの風は寒いくらゐです。

ピューン。

あたまの上で音がしました。敵の砲彈ほうだんがとんできたのです。兵隊たち

は、はじめて弾たまの音をきいたので、顔を見合せ、それから、あたまの上を見上げました。

すると、それが合圖のやうに、敵の砲弾が、つづけざまにとんできました。あとからあとから、數もわかりません。さうなると、もうあたまの上を見てゐるひまありませんでした。

ドイツ軍も、すぐに撃ちだしました。撃ちながら進みました。敵のとりでとりでを躍りこえ、はねこえ、ときの聲をあげて、とつくわんしました。

敵も進んできました。すぐ目の前で、戦友がたふれるのを見ながら、助けることもできません。とても、げしい戦争でありました。

そのときでした。ヒットラーは、電氣にうたれたやうに、まつすぐに立ち上りました。どこからか、歌が聞えてくるではありませんか。ドイツ



ツ國歌です。彈の音をぬつて、おごそかに聞えてくるのは、なつかしいドイツの國歌だつたのであります。

ドイツよ　ドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に

敵の彈のなかにゐるのもわすれて、國歌を歌ふドイツ兵の、おくゆかしい心、やさしい心。

ヒットラーも歌ひました。そこにも、ここにも、ドイツ兵のゐるところからは、草の中から、丘のかげから、國歌を歌ふ聲が起りました。ドイツ兵は、歌ひながら進み、進みながら歌つたのです。ドイツのために、よろこんで死なうといふ、ドイツ兵の勇しい心でありました。

ドイツ軍のなかには、まだ十六七になつたばかりの、若い兵隊がをり

ました。ヒットラーのやうに、志願兵です。はじめ敵の弾がとんできたときに、若い兵隊は、さすがにおそろしさうな顔をしましたが、ドイツの國歌が聞えてきてからは、きふに元氣づいて、どしどし進みました。その日の戦ひがをはつてからも、とても元氣で、生れかはつたやうになつてしまひました。これは何のためだつたでせう。きつときつと、國歌の力にちがひありません。

かうして、戦争がはじまつて三年目の、一九一六年の九月でした。ヒットラーの聯隊は、イーブルの戦場から、ソナムにまはされましたが、十月七日の戦ひで、ヒットラーは、敵の弾に、足を撃ちぬかれました。『何の、これくらゐ。』

ヒットラーはぐわんばりました。隊といつしよに、進軍しようとしま



した。しかし、上官はゆるしませんでした。

『無理をするな。早くけがをなほして、またやつてこい。』

上官はいひました。

野戦病院へおくられたヒットラーは、すつかりきずがよくなるまで、大ぜいの、味方の負傷兵といつしよに、ベッドの上に横になつてをりました。

腕をもぎとられた兵隊。目をやられた兵隊。顔半分を、弾にとばされた兵隊もをりますし、ヒットラーのやうに、足を撃たれた兵隊もありました。なかには、軍醫の手當をうけながら、死んだ勇士もありました。

野戦病院には、薬のにほひと、血のにほひが、ぶんぶんただよひました。けれども、ドイツ兵の勇氣は、すこしもおとろへません。新しい負傷兵

がはこばれてくるたびに、

『これも聯合軍れんがふぐんのせいだぞ。』

『にくい聯合軍め。』

と、いひ合つて、なほさら、元氣になるばかりでありました。

あくる年の三月になると、ヒットラーのきずは、すっかりよくなりました。

『さあ、戦場だ。』

ヒットラーは、ふたたび戦線へ出て行きました。

ドイツ軍は、どこでも勝つてをりました。進みに進んでをりました。

そして、その年の十月十三日、ヒットラーのゐる隊は、ヴェルヴェイックで、イギリスの大軍と戦ひました。はげしい戦争で、このとき、イギリ



ス軍は、苦しまぎれに、毒ガスを用ゐて、ドイツ軍を苦しめたのでありません。

ヒットラーも、毒ガスにやられた一人です。見ることも、避けることもできない毒ガスです。ヒットラーは、毒ガスのために、頭がぐらくらしたかと思ふと、もうばつたりと、そこにたふれてしまつたのでありません。

ドイツ軍は、毒ガスを避けるために、しかたなく、隊をうしろにもどしました。そのときです。一人の大尉が、味方と反対の方に、ずんずん進んで行くのでした。

『とまれ。』

と、聲がかかりました。大尉の足がびたりと、草の上にとまりました。

『たれか。』

『ヴィーデマン大尉。』

『どこへ行くか。』

『部下をさがしに行きます。』

『部下といふのは、たれか。』

『アドルフ・ヒットラーごちやう伍長ごちやうであります。アドルフは、勇氣のある兵士です。ドイツ軍の規律きりつを、よく守る兵士です。姿すがたが見えませんか。さがしてまゐります。』

『よろしい。氣をつけて行け。』

『はい。』

ヴィーデマン大尉は、鐵砲の煙の中へ、かけだしました。夜でした。

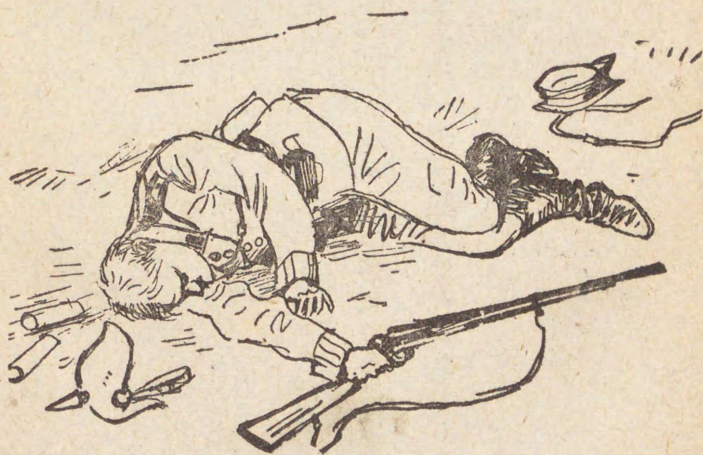


暗いなかに、ばつばつと光るのは、敵が大砲をうつ光でせうか。そこらいちめん、煙のにほひで、むせるほどです。

ヴィーデマン大尉は、たふれた味方を見つけるたびに、かけよつて、だき起してみました。

『これではない。』

そつと土の上にねかしては、また進みました。何人目かの兵士を見つけたとき、



『おお、アドルフ。』

大尉は、うれ

しさうに叫びま

した。だき起して、

身體をしらべました。血も

ながれてゐませんし、けがをしたやうす

もありません。

『毒ガスにやられたのだな。よし、助けてやるぞ。』

大尉は、ヒットラーを背せにおぶつて、味方のあとを追ひました。サー

ベルが、靴にからみついて、ガチャガチャと鳴なりました。

ヒットラーは、かうして助けられたのです。氣がついたとき、ヒット





ラーは、病院のベッドの上にてをりました。

『うう。』

ヒットラーは、うなりました。目をあくことができなかったのです。

ほうたいで、しつかり、二つの目がふさがれてゐたのです。

『氣がついたな。』

ヴィーデマン大尉が、聲をかけました。

『はい。』

ヒットラーは、顔を上げて、大尉の顔を見ようと思いました。

『ヴィーデマン大尉殿でありますか。』

『さうだ。ひどく痛むか。』

『いいえ、何ともありません。自分は、どうして助けられたのですか。』

『私がつれてきた

のだ。』

『すみません、

大尉殿。』

ヒツ

トラーは

手をさし出

しました。大尉はその手

をにぎつて、

『しつかりしろ。お前は、り

つばなドイツ軍人だ。私は、



作者王



部下のドイツ軍人をすくつたまでだ。禮なんかいつてくれるな。』

・大尉は、なにげなくいひました。恩に着<sup>き</sup>せたところのない、男らしい大尉の言葉に、ヒットラーは、心のなかで、うれし泣きに泣<sup>な</sup>きました。

『大尉殿。』

強く強く、大尉の手をにぎつたヒットラーは、大尉の心を、どんなに有難く思つたかしれません。いつかは恩返しをしたいと考へたのでした。ずつとずつと後、ヒットラーがドイツの總統<sup>そうとう</sup>になつてから、ヴィーデマン大尉は、すぐにかけてきました。

『アドルフ。いや、ヒットラー閣下、おめでたう。』

大尉は、わがことのやうによるこんだのでした。それから、ずつと、

大尉は、ヒットラーのそばにゐて、相談<sup>さうだんあひて</sup>相手になつたり、ヒットラーの

身體を守つたりして、昔どほり、仲よく、ドイツのためにつくしてゐるといふことであります。

## 赤旗行列

ヒットラーは、目に、ほうたいをしたままで、ボメラニアの、バゼヴァルク陸軍病院へおくられました。

『軍醫殿、自分の目は、もうだめでせうか。』

『わかりません。世の中には、どうにもならぬと思ふことでも、よくなることがあります。あなたの目もさうです。見えるやうにならないとはかぎりません。』

『さうですか。有難う。』



ヒットラーは、につこりしていひました。

軍醫の言葉をきいて、自分の目は、もうなほらないのだと思つたのでした。けれども、ヒットラーは、けつして、やけを起しません。よく軍醫のいひつけをまもつて、手當てあてをおこたりませんでした。百に一つの不思議しぎが起つて、なほらぬはずの目が、見えるやうになるかもしれない。ヒットラーは、神さまにおまかせします、と心の中で、いつてをりました。

すると、不思議が起りました。だんだん痛みいたがとれるにしたがつて、目の前が、すこしづつ、明るく見えてきたのでした。ある日、軍醫は、ヒットラーの目を診察しんさつしてから、おどろいたやうにいひました。

『ヒットラーごちやう伍長。君の目は、かならずよくなります。』

その通りでした。いく日かのちに、ヒットラーは、目の前で、何かうごいてゐるのを、見る事ができました。

『何か見えますか。』

軍醫がいひました。

『はい。』

ヒットラーは、手をのばして、軍醫の顔にさはらうとしました。

『よかつた。もうすぐです。』

軍醫の聲も、うれしさうにはづみました。

間もなく、ほうたいを取りのける日になりました。

『さあ、靜かに目をあいて見たまへ。』

かういはれて、ヒットラーは、すこしづつなぶた臉をあげました。だいいち



に、明るい光りが、さつと目の中に、とびこんだやうに思ひました。

『あつ、見える。』

軍醫の顔。天井<sup>てんじやう</sup>。壁<sup>かべ</sup>。寢臺<sup>しんだい</sup>。いちどに、いろいろなものが見えてきま

した。見失つた希望の光りが、ほのほのとさしてきたのです。ヒットラーのよろこびは、どんなだつたでせう。

目が見えるやうになると、も一度、戦線へ行きたい、とヒットラーは思ひました。二度でも三度でも、いのちのある限り、身體のつづく限りドイツのために、戦ひたいと考へたのでありました。ところが、思ひもよらぬことができて、ヒットラーはもう戦線へ行くことができなくなつたのです。ヒットラーの知らぬ間に、戦争はおしまひになつてゐたのであります。

十一月十日のことです。一人の年をとつた牧師が、バゼヴァルクの病院にきて、負傷兵にひきました。

『みなさん。戦争は、もうをはりました。あなた方が、いのちをなげだして戦つた戦争も、媾和になりました。ホーヘンツォルン王家は退位なされ、ドイツは共和國になつたのです。』

牧師の言葉は、とぎれとぎれに、いかにも悲しさうでした。牧師は、木の葉のやうに青ざめ、手をぶるぶるとふるはせてをりました。

『ホーヘンツォルン王家が、どんなにドイツのためにおつくしなされたかは、よく知つてゐることと思ひます。王家は、ドイツとドイツ國民とのために戦はれました。退位なされたのもドイツのためをお考へなされたからであります。私たちは、新しい政府の命令に、したがはねばなら



ないのです。』

牧師の目から、

涙のおちるのが

見えました。

病室は、

ふかい

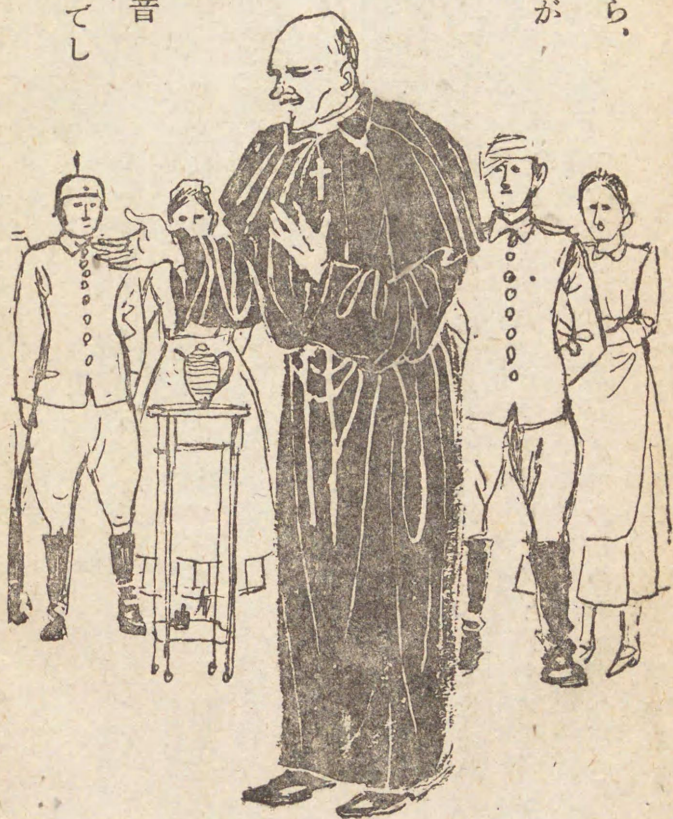
森のや

うに、し

んとして、物音

一つしませんでした

た。



「この上は、私た

ちは、聯合國

のなさけ

にすが

るより、

いたし

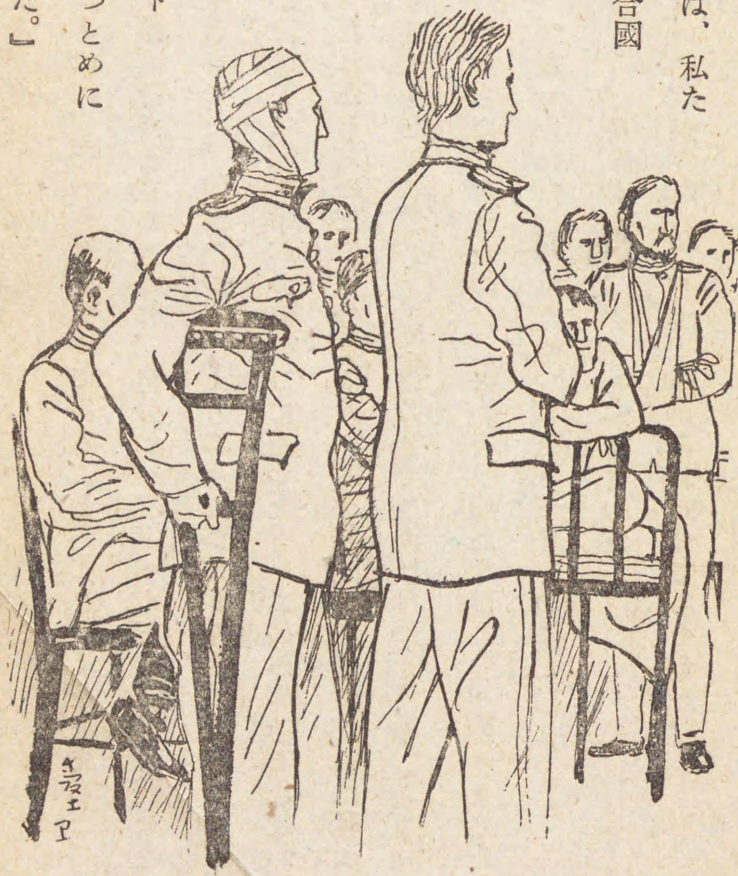
かたあり

ません。

それが、ド

イツ人のつとめに

なりました。」



キタエ



牧師の沈んだ聲は、だんだん低くなつていきました。

ヒットラーには、そのさきをきいてゐることができなくなりました。

ヒットラーは、そつと立ち上つて、自分のベッドへもどると、身體をなげだして泣きました。腹がたつて、どうにもしかたがなかつたのです。

(ドイツが降参<sup>かうさん</sup>して、戦争がおしまひになつたといふのか。そんなばかなことを、たれがしたのだ。自分たちは、四ケ年間、たれのために戦つたのか。雨風にうたれ、弾のなかを進んだのは、ドイツを思へばこそだ。勝ちたかつたからだ。それなのに、こつそり敵と相談して、降参をしたやつは、いつたいたれだ。そんなやつこそ、ドイツの敵だ。)

ヒットラーは、身をもんで、くやしがりました。

『しかたないさ。かうなることは、前からわかつてゐたのだ。』

となりのベッドの負傷兵が、あきらめたやうにいひました。

『かうなるのがわかつてゐたつて？』

ヒットラーは、噛みつくやうにいひました。

『それなら、なぜ君は戦争をしたのだ。』

『怒るなよ。僕はドイツ軍人だ。國のためには、どこまでも戦ふよ。けれども國內の人は、戦争にあきてしまつたのだ。そればかりぢやない。マルクス主義者どもが、いろいろなことをいつて、國民が、戦争をいやるやうにしむけたのさ。まあ、通りを見たまへ。』

負傷兵は、窓を指しました。

ヒットラーは、窓のそばへ行つて、表通りをのぞいてみました。

大ぜいの職工が通ります。腕をくんで、帽子をふりまはして、なにか



わめきちらしてゐるありさまは、まるで氣狂ひのやうです。手に赤旗をもつてゐるところから、これは共產黨きようさんとうだといふことがわかりました。

戦線では、雨あられととんでくる、敵弾のなかで、ドイツ國歌が歌はれたのに、銃後では、このやうな、なさけないありさまです。わめき叫んでゐるマルクス主義者どもの顔が、ヒットラーの目には、ドイツをねらふ惡魔あくまに見えました。ヒットラーは拳こぶしをにぎつて、行列の方を、じつとにらみつけました。

『見たか、ヒットラー伍長。』

戦友の傷病兵は、とんと肩をたたきました。

『見た。』と、ヒットラーはいひました。

『ユダヤ人の手先になつた、マルクス主義者どもが、ドイツをほろぼさ

うとしてゐるのだ。あの國賊ども。だが、けつしてドイツはほろびないぞ。ほろびるものか。いまに見てをれ。』

ヒットラーの言葉は、火のやうに燃えあがりました。

『僕は政治家になる。』

『政治家だつて……』

『さうだ。そしてドイツを救ふ<sup>すく</sup>のだ。このありさまを見て、政治家にならうとしない者は、ひけふ者だ。』

強く強くヒットラーはいつたのでありました。

## 鼠<sup>ねずみ</sup>とパン

戦争はをりました。イギリス、フランス、そのほかの聯合軍のため



に、ドイツは負けてしまつたのです。戦争では負けなかつたのですが、國內に、マルクス主義の裏切り者がでたために、媾和かうわをしなければならなかつたのです。

戦争は、戦線の兵隊だけが強くてもだめです。銃後の國民が、兵隊と同じ心になつて、つらいこと、苦しいことをしのび、どこまでもやりぬくといふ覺悟かくぶが、大切なのであります。

一九一八年十一月九日。ドイツ皇帝くわうていウイルヘルム二世は、退位たいゐして、オランダに行きました。ドイツは共和國きやうこくになつて、六人ほどの人が、假りの政府をつくり、エーベルトといふ人を、大統領だいてうりやうにえらびました。エーベルト大統領は、シャデイマン内閣ないかくをつくりました。これで戦争前とは、すっかりちがつたドイツになつたわけであります。かういふことを

させたのは、ドイツを強い國にさせまいといふ、聯合國のずるい考へだつたのであります。

媾和かうわと同時に、ドイツは、軍人や武器をへらすといふ約束をしました。

これも聯合國がいひだしたことです。聯隊の數もへらされ、飛行機も、大砲も、みんなすくなくさせられ、だいじな軍艦や、土地まで、聯合國に、とられてしまつたのであります。それでも、ドイツは怒ることができなかつたのです。戦争に負けた國は、かはいさうではありませんか。

ヒットラーには、見ることに、聞くことが、腹の立つことばかりでした。さういふとき思ひ出すのは、ミュンヘンの町です。ミュンヘンは美しい町です。いい人のすんでゐる町です。ドイツを大切にする人たちのゐる町です。



（さうだ、ミュンヘンへ歸らう。）

一九一九年の三月。あたたかい春風のなかを、ヒットラーは、久しぶりで、ミュンヘンへもどつてまゐりました。

ヒットラーは、ミュンヘンの愛國者をあつめて、ふたたび、もとのやうにりつばなドイツ國をつくらうといふ、運動をはじめました。

すると、これに氣づいたのが、マルクス主義のあつまつてゐる共産黨です。ドイツの共産黨も世界中のどこの國の共産黨と同じやうに、ロシヤ共産黨の手先きだつたのです。

『ヒットラーといふ、兵隊あがりの男は、共産黨のためにならぬことをするらしい。いまのうちにやつつけてしまへ。』

共産黨では、ヒットラーに、目をつけて、ヒットラーのすることに、

するどい目を光らせはじめました。

四月二十七日の朝。まだうす暗いうちに、共産黨の黨員とうあんが二人、ヒットラーの家の戸を、どんとたたきました。

「だれだ。」

ヒットラーは、はね起きました。二人の黨員は、ずかずかと、ヒットラーの部屋へやへ上りこんで、

「アドルフ・ヒットラー。われわれといつしよにきたまへ。」  
と、おどしつけました。

「何の用か。」

「來ればわかる。來たまへ。」

「わけをいへ。」



いひながら、ヒット

ラーは、すばやく銃

を手にとつて、二人

の方へ、ぴたりとね

らひをつけました。

『君たちに用はない。

共産黨にも用はない。歸れ。

歸らなければこれだ。』

ヒットラーが、一步進めば、

二人は一步さがります。二步

進めば、二步さがりました。



とうとう戸口までさがつた二

人は、そこから身をひる

がへして、後をも見ず

に、逃げ出してしま

ひました。

『ははははは。意<sup>い</sup>

氣<sup>き</sup>地<sup>ぢ</sup>なしのマル

クス兵士め。』

ヒットラーは、

をかしさうに笑ひました。けれども、ヒットラーは、共産黨が、自分を  
ねらつてゐることがわかつたので、それから、出入に氣をつけて、め





つたに表へも出な

いやうにしま

した。

その

後、

まも

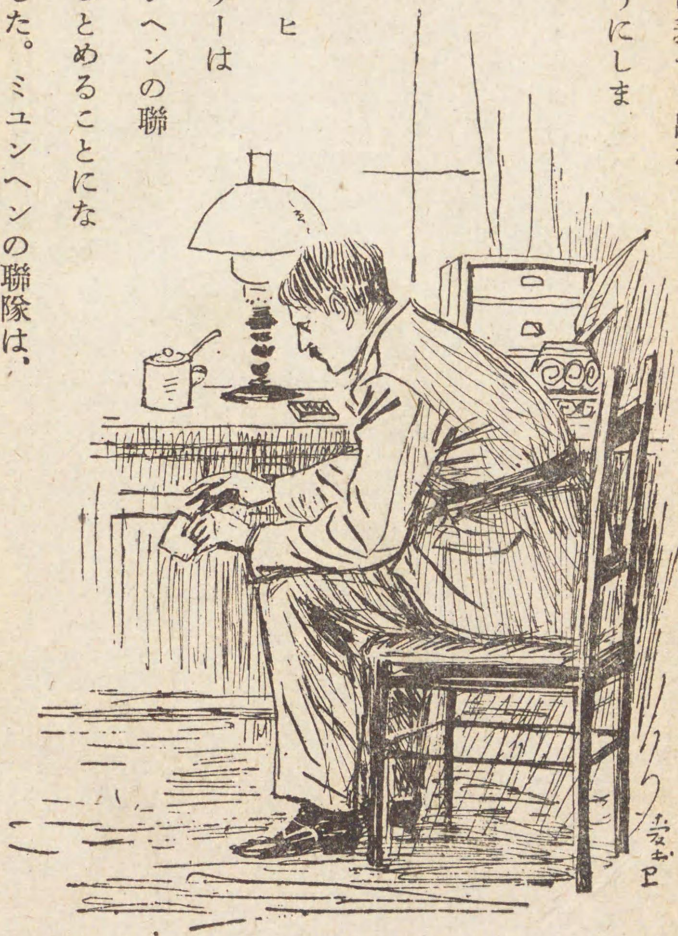
なく、ヒ

ットラーは

ミュンヘンの聯

隊へつとめることにな

りました。ミュンヘンの聯隊は、



ちんお  
P

共産黨でなかつたので、ヒットラー

もあんしんすることができたわけです。

ヒットラーは、聯隊の中の、小さい部屋に、ただ一人で住んでをりました。古いきたない部屋で、夜になると、鼠ねずみがあばれてしかたがありません。ヒットラーがみてゐても逃げないのです。

『それつ。』

ヒットラーは、パンを一きれ、投げてやりました。すると、あちらこちらから、なんびきも走りでて、あらそつて、パンにか





ぢりつくのでありました。

(かはいさうに。)

ヒットラーは、鼠をふびんに思ひました。腹のすいたときのつらいことを、ヒットラーは、よく知つてをりました。ウヰンの工場て働いてゐたときも、ミュンヘンでペンキ畫を描いてゐたときも、いつもひもじい思ひをしてゐたことを思ひだすと、鼠がかはいさうでたまりません。

『さあ、もつと食べるがよい。』

パンをむしつては投げ、むしつては投げ、ヒットラーは、いつまでも鼠のうごくのをながめてをりました。

人にいちばんつらいのは、食物のないことです。食物の足りないほどくるしいことはありません。いま、ドイツは、聯合國にいぢめられて、食

物も満足まんぞくにはないのです。何といふ不幸なこととせう。ドイツ人は、いつばい食べて、うんと強くなければいけないのだ。それには、どうすればよいか。

ヒットラーは、毎日、そればかり考へつづけました。えらい學者の書いた本を読んだり、町のやうすをしらべたりしました。

(ユダヤ人をドイツから追ひだすことだ。マルクス主義の共産黨をたふすことだ。あの悪者がゐる。あひだは、ドイツは強い國になることはできない。)

ヒットラーは、はつきりと心をきめました。いよいよ、ドイツのために、共産黨と戦ふかくごをしましたのであります。



## 六人クラブ

九月のある夜でした。

ヒットラーは、秋めいたミュンヘンの町を、ただ一人で歩いてをりましたが、一軒の酒場の<sup>さかば</sup>前へくると、足をとめて、中のやうすをうかがひました。

中では、二十人ばかりの人が、うすぐらいあかりの下に集つて、まん中の一人が、手をふりあげながら何か演説<sup>えんぜつ</sup>してゐるやうです。

(ここだな。)

ヒットラーはうなづいて、ぬつとはいつて行きました。すると、二三人が、うしろを振り向いたので、ちよつとあたまを下げてから、あいて

ゐる椅子に、腰をかけました。

その日、ヒットラーは、この酒場に「六人クラブ」の集會があるといふことをきいて、わざわざやうすを見にきたのでした。

「六人クラブ」といふのは、六人の人が集つて、政治について、おたがひの考へを話し合ふ會だつたのです。おもだつた會員は、鍛冶屋のアン・トン・ドレッフスラー、技師ぎしのゴットフリード・フエダーなどでありました。

ヒットラーがはいつて行つたときは、ちやうどフエダーの話がすんだところで、他の一人が立ち上りました。その男は、オーストリアは、ドイツとわかれた方がよい、といふ演説をしてから、とくいさうに、

『いかがです、みなさん。私の考へは……』



と、あたりを見まはしました。

『反対だ。』

ヒットラーは、すつくり  
立ちした。

『それは、大へんなまちが  
ひです。オーストリアとド  
イツは、もともと同じ民族  
です。二つの國は、手をに  
ぎり合ひ、助け合ひ、一つ  
の國にならなければいけな  
いのです。オーストリアの



幸福は、このほかにありま

せん。』

ヒットラーがいひまし  
た。

ばちばちと、みん

なが手をたたきま

した。みんな

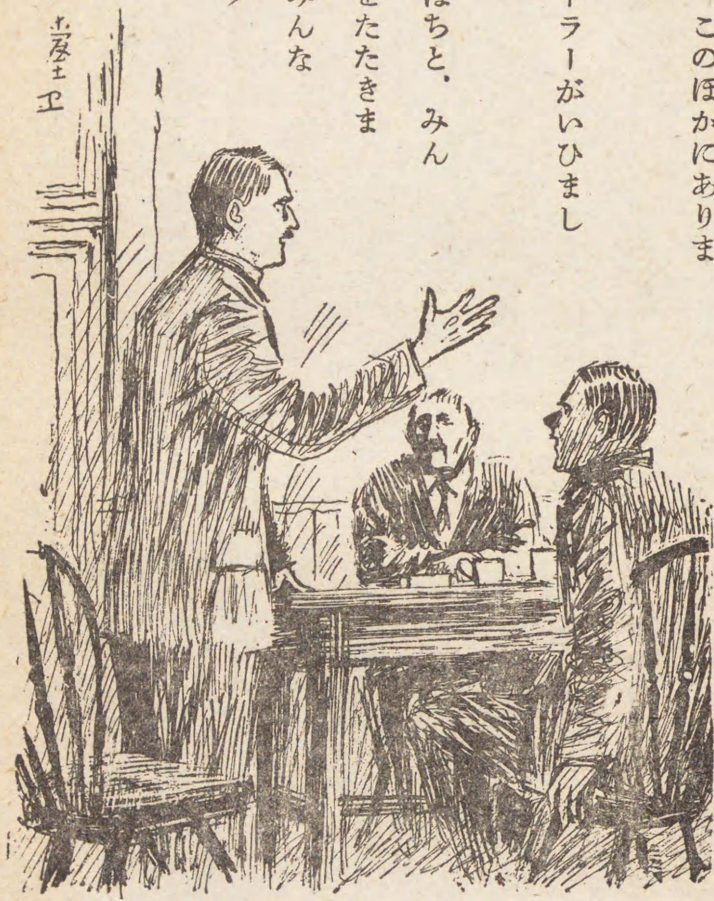
は、ヒツ

トラー

の演説

に賛成

土屋土工





したのです。

鍛冶屋のドレッフスラーが、ヒットラーのそばへ近づいて、

『君は、どなたですか。』

と、ききました。

『アドルフ・ヒットラー。』

『そして、お年は……』

『三十一歳。』

『しつれいですが、どこにお住みですか。』

『聯隊につとめてをります。伍長です。』

まもなく、ヒットラーが歸らうとすると、ドレッフスラーは、入口まで追ひかけてきて、

『これを読んで下さい。』

小さな本をわたしました。

『有難う。』

ヒットラーは、本をポケットへ押しこんで、そのまま聯隊へかへりました。本の表紙<sup>へ</sup>には「われらの政治の目ざめ」とありました。

ヒットラーは、パラパラと頁<sup>ページ</sup>をめくつてをりましたが、そのうちにねつしんに読みだして、とうとうをはりまで読んでしまひました。

ドイツを愛せといふこと、どうすればドイツが幸福になるかといふこと、そのほか、いろいろ書いてあることは、いつもヒットラーが考へてゐるのと、よく似たことばかりで、しかもヒットラーの考へてゐるよりも、もつと深く、くはしく書いてあつたのです。



『これは愛國者の言葉だ。こんどの集會しふくわいにも行つてみよう。』

ヒットラーは、ひとりごとをいつて、本を大切に棚たなの上にのせました。自分と同じことを考へてゐる者が、同じ町にゐると思ふだけで、大へんうれしかつたのです。希望の光りが、すこしづつ近づいてくるやうに思へたのであります。ヒットラーは、ミュンヘンへ來てよかつた、と思ひました。

一週間ほどのちに、「六人クラブ」から、郵便ゆうびんがとどきました。

『君を黨員とうるんにすることにきめました、次の集會にも、ぜひ出席して下さい。ドイツ労働者黨らうどうしゃとう。』

手紙には、さう書いてありました。ヒットラーは、をかしさうに笑ひました。

(おやおや、僕は、いつの間にか、六人クラブの黨員にされてしまったぞ。)

笑ひながら、ヒットラーは、會場へ出かけて行きました。小さな、がらんとした會場には、四人の人が、たいくつなやらすで、椅子いすにかけてをりました。しばらくすると、一人來ました。またしばらくして一人來ました。かうして六人が集りました。「ドイツ労働者黨」といつても、人數はこれだけなので、「六人クラブ」ともいはれてゐたのでありました。

やがて、會議がはじまりました。それがすむのをまつて、ヒットラーは、黨のことについて、わからないことをききただしました。そして、黨には、ごくわづかな財産さいさんしかないとや、帳面ちやうめんもなければ、ゴム印一つないことがわかりました。それどころではありません。ドイツ労働者



黨はどんなことをするのかといふことすら、はつきりきまつてはゐなかつたのです。

ヒットラーは、すこしあきました。こんなことでは、大ぜいの人に信用しんようされる目あてがありません。

（このやうな仲間に加つても、なんにもならないのではないかしら。）

ヒットラーは、考へこんでしまひました。

『僕の入黨のことは、すこし考へるあひだ、待つて下さい。二三日です。二三日のうちに、はつきりした返事をします。』

さういつて、ヒットラーは聯隊へもどりました。

ドイツ労働者黨へはいらうか、はいるまいか、ヒットラーは迷まよひました。政治家になつて、ドイツを救ふためには、一人の力では、とてもだ

めです。同じ心をもつた大ぜいが、力を合せなければできないことです。しかし、それまであつたドイツの政黨は、どれもこれも考へがまちがつてゐる上、黨員のねつしんが足りません。ドイツ労働者黨は、人數こそまだわづかしかりませんが、考へが正しい。ドイツのために力をつくさうとしてゐます。ドイツのための、ただ一つの政黨であります。

(よし、入黨しよう。ドイツ労働者黨を、ドイツ第一の黨にし、正しい政治を行ふのだ。)

けつしんがきまると、ヒットラーは、すぐに出かけて行つて、「六人クラブ」ドイツ労働者黨に、入黨の手續きをすませました。

黨員第七號——ヒットラーは、ドイツ労働者黨の、七人目の黨員になつたのであります。



## ナチスの旗

ヒットラーはドイツ労働者黨を、大きくしようとして、力をつくしましたが、思ふやうにいきませんでした。集會をひらくたびに集つてくるのは、いつも黨員の七人だけです。

『七人だけではしかたがない。もつと大ぜいの人を集めて、われわれの考へをきいてもらはうではないか。』

ある日の集會で、ヒットラーは、かういひだしました。

『それはさうだ。大ぜい集つてくれれば、それはうれしいが、どうして人を集めるのか。』

『人に知らせるのだ。集會の場所と日を知らせて、みんなに来てもらふ

のだ。』

ヒットラーの考へに、六人の者もすぐ賛成しました。そこで、印刷した手紙を、ミュンヘンの町の人たちへ、二百枚もだしました。ことに、ねつしんなヒットラーは、自分だけで八十枚も出しました。しかし、それほどにしても人は集りませんでした。

『これではいけない。新聞に廣告を出さうではないか。』

新聞に廣告するには、廣告料をとられます。ヒットラーは、持つてゐるだけの金を、みんなの前に出しました。

『僕も。』

『僕はこれだけある。』

七人の黨員はそれぞれ金をだしました。ヒットラーは、その場で廣告



を書き、すぐに新聞社へと届けました。「ミニッツヒナ・ベオバハター」といふその新聞に、この廣告がでると、町の人もめづらしく思つたのでせうか。集會には、百十一人も集りました。

ヒットラーは、二番目に、演説えんぜつすることになつてをりました。

『ヒットラー君。大丈夫ですか。』

議長のハーラーは、しんばいさうにききました。

『演説ができるか、とおつしやるのですか。』

『さうです。せつかく大ぜいの人が集つても、演説がまづいと、みんな歸つてしまひますからねえ。』

ヒットラーは、につこり笑ひました。

『まあ、見てゐて下さい。』

そして、ヒットラーは演壇えんだんに立ちました。

『諸君。』

といったヒットラーの聲は、ぴーんとひびきわたりました。ハーラーも、思はず身體をのりだしました。ヒットラーの聲は、だんだん高くなりました。また時にはゆつくりと、大水の流れるやうに、力強くつづきました。

百十一人の人も、六人の黨員も、ヒットラーの言葉を、一言も聞きのがすまいと、耳をすませました。

ドイツ人はドイツを護まもらなければいけない。ユダヤ人とユダヤ人の手先きのマルクス主義者に、だまされてはいけない――。

ヒットラーは叫びました。二十分だけ演説するはずだったのが、三十



分あまりになつてしまひました。

演説がをはつたとき、會場には、われるやうな拍手はくしゅが起りました。その拍手は、ように静まりませんでした。ヒットラーの演説は、きいてゐた人を、心のそこから、感動かんどウさせたのです。

一人の黨員が、帽子ぼうしをさかさまにして、人々に向かつていひました。  
『われわれの考へに賛成して下さる方は、いくらでも運動費うんどうひを寄附きふして下さい。』

そして、會場をまはりました。人々はよろこんで、銀貨ぎんぐわや紙幣きつを、帽子の中へなげこみました。あとで數へてみると、みんなで三百マルクばかりになりました。

七人の黨員の顔は、かがやきました。

『これだけあれば、また演説會をひらくことができる。』

一人がいひました。すると、ヒットラーは手を振つて、

『演説會がひらけるのもうれしいが、それよりも、もつとだいじなことがある。それはミュンヘンの人たちが、僕らの考へに賛成してゐるといふことがわかつたことだ。しつかりやらう。僕らの味方<sup>みかた</sup>はいくらでもふえるのだ。いよいよ、これからだ。』

『さうだ。ドイツ労働者黨萬歳だ。』

黨員は勢ひづきました。ユダヤ人も、共産黨もおそろしくはありません。ドイツ人の心は、ドイツ人の心に通じる、と思つたからです。

集會をひらくたびに、集つてくる人の數も多くなりました。百四十人、二百人とふえて、二週間目には、四百人になり、寄附金<sup>きふきん</sup>もたくさんでき



ました。そこで、黨

の名を、「國民社會主

義ドイツ労働黨」と

かへました。「ナチ

ス」といふのは、こ

れをちぢめて呼んだ

名であります。

ナチスになると、

それまで黨首だつた

ハーラーがやめて、ド

レツフスラーがえらばれ



國民社會黨設立の宣言

ました。ドレツフスラーは、ヒットラーと相談して、黨の大會をひらき、ミュンヘンの人に、ナチスの正しいことを知らせようと思いました。

一九二〇年二月二十四日。

ナチスの大會の日です。前日に町の辻や角の人目につきやすいところへ、まつ赤なはり紙をはりました。はり紙には、ナチス大會を知らせる文字が、大きく書いてありました。

赤い色は、共産黨で、よく用ゐる色ですから、きつと共産黨員が怒るだらう。ヒットラーはかう思つて、わざと赤い色を用ゐたのでした。

ヒットラーの思つたとほりです。共産黨員は怒りました。

『ナチスのやつ。われわれをばかにしてゐる。よし、それなら、やつらの大會をたたきつぶしてやるぞ。』



共産黨員は、町の人人にまぎれこんで、會場へはいつてしまひました。七時十五分になりました。もう開會の時間です。ヒットラーが、いそいで會場へかけつけてみると、會場は、人でいっぱいでした。

『ああ、よかつた。』

ヒットラーは、ほつとしました。もし人が集らなければ、ミュンヘンの人が、ナチスをきらひだといふことになるのです。ヒットラーは、そればかりが、しんばいだつたのです。

ヒットラーは、二番目に演説しました。演壇に立つて、一言二言いはじめると、

『だまれ。』

と、叫んだものがあります。

『ヒットラー、ひつこめ。』

かうとなつたものもあります。

共産黨員です。共産黨員が、ヒットラーの演説を、じやましようとしたのです。

『静かにしたまへ。』

ヒットラーは、聲のした方を、ぐいとにらみつけました。

『騒<sup>さわ</sup>ぎたてる者は、會場から出て行きたまへ。』

『何だ。ほらふきヒットラー。』

『やめろヒットラー、引つこめ。』

あちらから、こちらから、共産黨のらんばう者は、ヒットラー目がけて、とびかかりさうにしました。そのとき、演壇のうしろから、さつと



をどり出たナチスの若者たちがあります。

『じやま者。來い。』

ナチスの若者と、共產黨員との間に、はげしい争ひがはまりました。たちまち、會場は、蜂の巢をつついたやうな騒ぎです。が、それもわづかな間で、會場はまた、もとのやうに静かになりました。ナチスの若者たちは、あばれまはる共產黨員をとらへて、會場からつき出してしまつたのであります。

『諸君。』

ヒットラーは、聲をはり上げました。

『いまの騒ぎを何と見たか。ナチスは、正しいドイツ人の道を行くのだ。ナチスのじやまをする者があるならば、たれでも遠慮はしない。ナチス

は力づくでも、これをうちやぶつて進むまでだ。ナチスには、おそろしいといふことはない。ドイツのために、ただ真直ぐに進むだけである。』  
わつ、といふ聲。そして雷のやうな拍手。

聲と拍手は、いつまでもつづきました。ヒットラーは、しばらく演壇に立つて、騒ぎのしづまるのをまたなければなりません。やがて静かになつたので、演説をつづけることができました。

『ここに、わがナチスの實行しようとする二十五ヶ條の約束がある。』

ヒットラーは、第一條から、たかだかと読み上げました。そのたびに會場には、雷のやうな拍手が起りました。

大會は、かうして大成功ををさめました。

ミュンヘンの町の人は、争つてナチスに入黨してきました。學者もあ



りました。軍人もありました。商人も職工も、若い學生もありました。いまのゲーリング元帥<sup>げんすゐ</sup>も、ヘス副總統<sup>ふくそうとう</sup>も、このころ入黨した黨員であります。

あるとき、演説をしながら、ヒットラーは、演壇のすぐ前で、ねつしんにきいてゐる青年に目をつけてをりました。演

説がすむと、この青年は、つかつかとヒットラーに近づいてきました。

「僕を黨員にして下



さい。』

『君はたれだ。』

ヒットラーは、青

年のたのもしげな體たい

格かぐを見つめました。

『ヘルマン・ゲーリ

ング。ミュンヘン大學の

學生です。』

『なるほど。りつばな身體をしてゐるね。』

『軍人ですから。』

『軍人だつて？』



土  
女  
二



『さうです。』

ゲーリングは、につこりして、いひました。

『大戦に行きました。リヒトホーヘン飛行隊にをつた者です。』

『さうか。僕も軍人だ、伍長だ。』

ヒットラーは、青年の手をにぎりしめて、

『よろこんで、入黨してもらはう。』

と、いひました。

この青年が、のちのゲーリング元帥であります。ゲーリングも、ヒットラーのやうに、世界大戦に出征したドイツの兵隊です。しかも飛行將校ひかうしやうだつたのであります。ゲーリングの加つてゐた、リヒトホーヘン飛行隊の隊長リヒトホーヘン中尉は、聯合軍の飛行機を、百臺もうちおとし

た有名な勇士であります。その部下のゲーリングも、隊長にまけない勇士だつたのであります。

また、あるときの演説會では、演説をききながら、しきりに膝ひざをたたいてゐる男が、ヒットラーの目につきました。

『君は、なぜ膝をたたいたのだ。』

あとで、ヒットラーがたづねると、その男は答へました。

『あなたの演説に感心して、そのたびについ膝をたたいてしまつたのです。あなたこそ、ドイツを救ふ人だ。あなたならばきつとやりとげられる。私は演説をききながら、うれしくてたまらなかつたのです。』

『では、ナチスにふとうへ入黨する氣はないか。』

『あります。大あります。』



かういつて、すぐに入黨しました。これがアドルフ・ヘス、のちのヘス副總統であります。かうしてナチスの黨員になつてからはゲーリングもヘスも、ヒットラーの片腕かたうでになつて、ナチスのためにはたらきました。第二の世界大戦といはれる、ポーランド進軍のはじまつたときに、戦線へ向かふヒットラーがいつた言葉があります。

『ヒットラーに、何かかはつたことがあれば、あとのことはゲーリング元帥にでもらふことにした。もし、ゲーリング元帥にもかはつたことがあれば、そのかはりはヘス副總統である。』

といふのです。かはつたこととは、たふれたらといふことです。

ヒットラーが、ゲーリング、ヘスの二人を、どこまでも信じてゐるといふことがわかるではありませんか。





そのころには、新しい黨員がはいつてきたばかりではありません。黨の規則もできたし、突撃隊をつくり、旗をつくつたりしました。突撃隊といふのは、演說會場へ共產黨員がきて、演說をぶちこはさうとするので、これと戦ふためにつくつたのがはじまりで、のちには、人數も多くなり、鐵棒をもち、きまつた突撃隊の服を着て、軍隊と同じやうになりました。旗はハーケンクロイツといはれてゐる、あの逆まんじのしるしのある旗で、ナチスの黨旗であります。日本の戰國時代の武將も、みな自分の隊の旗をもつてをりました。楠木正成の「菊水」や、眞田幸村の「六文錢」などがそれです。

ハーケンクロイツは、外がはが赤で、中に白い丸があり、その中に黒い鈎の十字が描いてあります。この旗について、「赤は、われわれの考

へをあらはし、十字は闘たたかひをあらはすのだ。」と、ヒットラーはいつてをります。

ハーケンクロイツは、ミュンヘンの町町にひるがへりました。窓にもひるがへりました。赤と白と黒の、あざやかな色は、たれの目にもすぐついて、一目でナチスの旗といふことがわかりました。突撃隊は、カーキ色の服を着て、さあみんなも元氣に——といふやうに町をねり歩きました。

## 突とつ撃げき隊たい

西暦一九二一年一月。聯合國は、パリで會議をひらいて、ドイツから一千億マルクの賠償ばいしょうきん金をとることに決めました。賠償金といふのは、



戦争に負けた國から、勝つた國へ、戦争でつかつた費用ひようをはらふことをいふのです。

ドイツの人たちは、あまり賠償金が多いのに、びつくりしました。そんなにはらつては、これから、ドイツ人がくらしに行くこともできさうにありません。

『それは反對だ。』

ドイツの愛國團體あいこくだんたいの人人は、ひどく怒りました。

『そんなことをききいれる政府も、あまり意氣地いけぢがないではないか。』

人人は口口にいひました。じつとしてゐることもできません。人人は西から東から、王宮前のひろつばへ集つてきました。將軍會館にも、はげしい演說會がひらかれてをりました。

このままにしておいたならば、どのやうな大騒動になるかわかりません。政府は、大ぜい集つてはならぬといふ觸れをだした上、軍隊と警察に命じて、集つてゐる人を追ひはらはせました。銃を持つた兵士と、ピストルをもつた警官は、血眼になつて、町をとび歩きました。

ヒットラーはじめ、ナチスの人人は、ひどくしんばいました。ドイツは、騒いでゐるときではないと思ひました。みんなが心を合せて進まなければならぬときだと考へました。それには演説會をひらいて、大ぜいの人に、この考へを話さなければなりません。

ナチスは演説會をひらくことにしました。その日は二月三日。場所はチルクス・フローネでありました。

ヒットラーは、急に忙しくなりました。いくつ身體があつても足りない



いほど、忙しいのです。わづか十分で、演説の下書きを書き、すぐにタイプライターでうたせたくらゐ、忙しかつたのです。

いよいよ三日の朝になりました。町には雨がふつてをりました。冷い雨です。それに、風もすこし出たやうでした。

『トラックがまゐりました。』

武装した突撃隊員が、ヒットラーのところへ、とんできました。

『よろしい。では、すぐに用意をして、

出發！』

『はい。』

聲といつしよに、ばらばらとあ

らはれた隊員は、トラックのわき



トラック

腹に、まつ赤な布を巻き、その上に、ハーケンクロイツを押し立てました。

『行つてまゐります。』

一臺に十五六人づつ

のせて、二臺のト

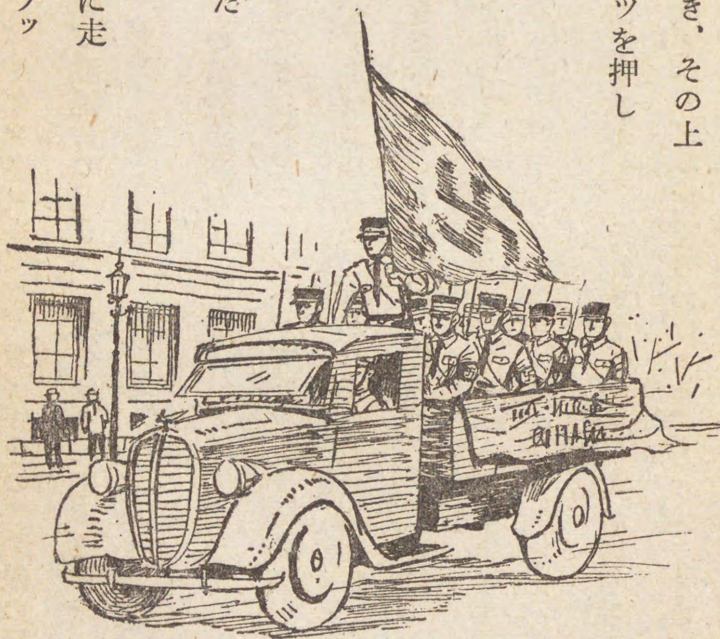
ラックは、すさま

じい音をのこして走りだ

しました。

雨の中をまつしぐらに走

る、赤い布を巻いたトラッ





ク。その上にはためく、ハーケンクロイツ。カーキ色の突撃隊の元氣な姿。<sup>すがた</sup>トラックから投げる演説會のビラは、雪のやうに散りました。

「ナチスだ。」

「演説會だ。ヒットラーの演説があるぞ。」

町の人は、目をそばだてました。ミュンヘンでヒットラーの名を知らぬ者はありません。ドイツがつぶれるかどうかの大事な場合に、ヒットラーは何を考へてゐるだらうか。人人は、それを知りたかつたのです。人人は、夕方になるのを待つて、チルクス・フローネへ押しよせてまゐりました。

演説會は、七時からじまるので、それまでに會場へ人が集まらなければ、この演説會は失敗といふことになるわけです。ヒットラーは、十

分ごとに、電話で、會場のやうすをきいてをりました。

『大丈夫です。もう會場は四分の三くらゐはいつてをります。切符賣場きつやうりばの前は、まだいつばいの人ばかりです。』

八時十五分前に、かういふ電話がかかつてきました。

『うまくいつたぞ。』

八時二分前に、ヒットラーは、自動車を會場へ走らせました。雨の中にそびえた會場には、六千人あまりの人が、身動きもてきないやうにつまつてをりました。

ヒットラーが、演壇に立ちました。六千人の人が、わつとをどり上つて、手をたたきました。みんなは、ねつしんにききました。ときには、水をうつたやうに靜かになり、ときには、あらしのやうに叫びました。



そして二時間あまりのながい演説がをはると、

『ハイル・ヒットラー。』

どこからともなく、さういふ聲が起りました。ハイルとは「萬歳」といふのと同じことで「ヒットラー萬歳」といふ意味であります。

『ハイル・ヒットラー。』

『ハイル・ヒットラー。』

いつまでもその聲がつづきました。そして、やうやくをはつたと思ふと、大ぜいの聲は、ドイツ國歌にかはりました。

ドイツよ　ドイツ　すべての上に

世界をあげて　すべての上に

ヒットラーも、しせい姿勢を正しくして、いつしよに歌ひました。ヒットラ

一の目には、涙がうかびました。

ミュンヘンの町の人は、ヒットラーを信用しました。ドイツを救ふ人はヒットラーだ、かう思ふやうになりました。ヒットラーの姿を見るとすぐに右手を高くさし出して、あいさつするのでありました。

『ハイル・ヒットラー。』

すると、ヒットラーも、右手を上げてこたへるのです。

『ハイル！』

これを見て、ざんねんに思つたのは、共産黨きょうさんとうです。共産黨は、どこま

でも、ヒットラーを敵にし、ヒットラーのじやまをしようとしてました。

演説會があるたびに押しかけて行つて、大聲でわめきました。小石を投げつけるやうなこともありました。けれども、ヒットラーは恐れません。



いよいよ聲を大きくして、ユダヤ人と共産黨のわるいところを、人人に知らせるのでありました。

ある演說會に、共産黨のひけふ者は、ビールびんを、こつそりもつて行きました。そして、演說中のヒットラー目がけて、遠くから投げつけました。

ビールびんが、ヒットラーの耳をかすめて、うしろの壁で、ガンと割れました。ガラスがびかと光つてとびちりました。

『亂暴者らんぼうものを、にがすな。』

ナチス突撃隊の若者は、共産黨員に、彈丸たまのやうにとびかかりました。共産黨員は、かくしてゐたナイフで、斬りつけました。なぐつたり、蹴けつたりのはげしい争ひで、けが人も出ましたが、負けて逃げるのは、い

つも共産黨員にきまつてをりました。四五十人の突撃隊員が、八百人の共産黨員をやつつけたこともあります。

『力づくでくるものは、力づくでたふせ。共産黨には、なさけをかけるな。』

ヒットラーは、かういつてをりました。突撃隊員は、よくこの言葉をまもつたのです。ヒットラーの命令があれば、敵の中はいふまでもありません。火の中へでも、水の中へでも、よろこんでとびこんで行くのであります。

## 石と鐵棒

ナチスと共産黨とは、おたがひに憎み合ひました。共産黨は、ナチス



をぶちこはしたいと考へ、

ナチスは、共産黨を、一

人のこらず征伐<sup>せいばつ</sup>したい

と思ひました。こ

の二つの團體は、

いつもにらみ合

ひ、會<sup>あ</sup>ひさへす

れば、はげしい

争ひを起したの

であります。そ

れにドイツ政府



も、ナチスをはじめ、  
やまものあつか  
ひにして、ナチ  
スのすることを  
抑<sup>おさ</sup>へつけようと  
するのでした。

一九二二年には、  
政府の目が、いよいよ  
ナチスの上に光り、

ナチス黨員は、どしどし警<sup>けいさつ</sup>察へつれて行かれました。ナチスでは、政府  
にむかつて、その考へ方がちがつてゐると注意しましたが、政府はきき



ナチス  
E



いれません。

六月、ナチスの大行進が行はれました。いままでになかったやうな、大ぜいの進軍でありました。

音楽隊を先頭<sup>せんとう</sup>に立てて、制服の黨員數千人が、列もみださずにすすむところは、まるで規律<sup>きりつ</sup>正しい軍隊のやうに堂堂として見えました。六ヶ中隊の突撃隊は、この大進軍を守つて、じやまするものは一打ちと、するどい目を八方にくばつてゐるのです。見物の人たちは、目をみはり、思はず息<sup>いき</sup>をのんだのでした。かうして、行進が、王宮廣場へついたときでした。そこに待ちぶせしてゐた共産黨員は、行列にむかつて、見物の人ごみの中から、ばらばら小石を投げつけました。いつものひけふなやりかたです。

「出てこい。」

突撃隊員は、見物の中にまぢつてゐる共産黨員にいひました。

「來なければ、引き出すぞ。」

すると、共産黨員は、こそこそと、人ごみの中にかくれてしまひました。中には向つてくる者もありましたが、たちまち、突撃隊にたたきふせられてしまひました。

ヒットラーは、廣場を集つてゐた人人に、演説しました。六萬人ばかりの人は、拍手はくしゅして、ヒットラーに賛成さんせいしたのでした。

かうなると、いよいよくやしがつたのは共産黨です。何とかしてナチスに一泡あわふかしてやりたいと、時をうかがつてをりました。すると、共産黨にとつて、この上なしといふときがまゐりました。一九二二年十月



のことです。ドイツの愛國團體が、コーブルグに集つて、大會をひらくといふことが知れたのです。ナチスも、その會場へ出て行くにきまつてをります。このとき、ナチスをやつつけてしまはうと、共產黨は、かう考へたのです。

ナチスでは、共產黨に、深いくらみがあるとは知りませんでした。もつとも、けつしてゆだんするナチスではありません。いつものとほり突撃隊十四ヶ中隊八百人が、ミュンヘンをあとに、コーブルグへの汽車にのりこみました。途中の停車場にも、ナチス黨員が待つてゐて、あとからあとから同じ汽車にのつたので、汽車はたちまち満員です。窓からは、元氣なドイツ國歌がもれ、ハーケンクロイツの旗が、ひらひらと動きました。

汽車がコーブルグへ着いたとき、停車場は、ナチス黨員とハーケンクロイツにうづめられ、ハイルの聲はわれかへるばかりでありました。

いよいよ停車場前から、行進しようとして、隊伍たいぎを組んでみると、大會の係かかりが、あわててかけつけてきました。

「隊を組んではいけないことになりました。」

「なぜだ。たれが、いけないといったのだ。」

「共産黨から、申し出てきたのです。ナチスが隊伍たいぎを組んで行進するなら、共産黨は妨害ぼうがいするといつてゐます。」

共産黨ときくと、ヒットラーは、かんしやくを起しました。

「われわれは、共産黨からの命令めいれいはうけない。はつきり斷ことわる。大會の係りは、なぜ、共産黨のいひぶんをきくのだ。共産黨が、おそろしいのか。」



ナチスは、共産黨がじやまをするなら、はねとばして進むまでだ。」

ヒットラーは、高く手を舉<sup>あ</sup>げて、前進を命じたのでありました。

ラッパがひびきました。ハーケンクロイツは、へんぼんとひるがへりました。前進、前進。靴音は、どつどつと大地をふみならし、土ほこりが、もうもうと舞ひ上りました。

大會の會場にきめられた射擊場<sup>しやげきぢやう</sup>には、共産黨員が、手ぐすねひいて待つてをりました。ハーケンクロイツが見えると、共産黨員は、さつと散つて、ナチスの周圍から、わめき叫んで、あばれこんできました。

『何をッ。』

突撃隊が立ちむかひました。そして、數分ののちには、うちのめされた共産黨員は、頭をかかへて逃げだしてしまひました。

共産黨が負けたのです。けれども、どこまでもずるくて、惡智慧わるぢゑのはたらく共産黨では、かげへまはつて、ナチスの惡口をいひふらすのでありました。

『コーブルグ市民諸君。ナチスにゆだんするな。ヒットラーは、コーブルグの平和をみだしにきたのだ。突撃隊はコーブルグをぶちこはさうとする爆彈ぼくだんだ。われわれ共産黨は、市民にかはつて、ナチスをコーブルグからたたきだすつもりだ。』

うはさは、すぐに、ヒットラーの耳にもはいりました。聞きのがすことのできないうはさです。ヒットラーの眉まゆがきりりと上ると、突撃隊に向つて命令を下しました。

『行け。正義と勇氣を愛する、ナチス突撃隊の諸君。敵は共産黨だ。行



つて突撃隊のねうちを知らせてやるのだ。』

おう——。

いつせいに叫んだ突撃隊員は、すぐさま敵のゐるといふ射撃場しやげきやうへかけつけました。共産黨員は一人ものがさぬぞ、と勢ひこんで行つたのです。ところが、何といふことでせう。突撃隊員がくるといふことをきいた共産黨員は、その姿すがたも見ぬうちに、どこかへ逃げ出して、練兵場れんべいぢやうには一人ものこつてをりませんでした。

突撃隊は、ぼかんとして、張合はりあひぬけがしてしまひました。ヒツトラーも、あきれてしまひました。

口先きだけのひけふ者を、相手にしてゐてもしかたがありません。ヒツトラーは、ミュンヘンへもどることにして、停車場へ引き上げたので

ありました。

ところが、困ったことができました。汽車の出る時間がせまつてゐるのに、汽車には運轉手も火夫もゐないありさまです。いろいろしらべてみると、汽車の乗組員が、共産黨員にだまされて、ヒットラーを困らせるために、わざと休んでゐるといふことがわかりました。

『よし、その男たちをさがし出せ。』

ヒットラーの命令で、突撃隊は、かくれてゐた乗組員を見つけたしてきました。

『君たちは、なぜ汽車を動かさぬのか。』

ヒットラーのするどい目でにらまされると、下をうつ向いたきりです。

『わかつた。』



ヒットラーは、ちよつと笑ひましたが、すぐに眞面目な顔になりました。

『君たちは、共産黨にだまされてゐるのだ。それで、われわれのじやまをするのだらう。だがわれわれは、すこしも困らないぞ。』

さういつて、黨員に、

『この男たちを、汽車にのせてしまへ。』

と、いひつけました。

『君たちが、どうしても運轉しないといふなら、われわれが運轉する。』

そのかはり、汽車にまちがひが起れば、君たちがだいに死ぬのだ。よいか。……たれでもよい、汽車を動かせ。』

これをきくと、いままで、啞おしのやうにだまつてゐた乗組員が、

『待つて下さい。』

と、口をききだしました。

『そんなあぶないことはやめて下さい。私たちが運轉します。』

『さうか。』

ヒットラーは、こんどこそをかしさうに笑ひました。

間もなく、汽車は、むくむくと煙をはいて、コーブルグを出發したのであります。汽車のじやまをして、ナチスを困らせようとした共產黨は、またしても失敗してしまつたのです。ヒットラーのために、裏をかかれてしまつたわけです。走りだした汽車を見て、地だんだふんで、くやしかりましたが、どうにもなりません。ヒットラーは、時間どほりにミュンヘンへもどることができました。



## ヒットラーあらし

一九二三年一月十一日は、ドイツにとつて、大へんな出来事が起つた日です。フランス軍が、ドイツ領のルール地方を占領せんりやうした日であります。『ドイツは約束の賠償金ばいしやうきんをはらはない。だからそのかはりに、ルールを占領したのだ。』

フランスではかういひました。しかし、ドイツ人が、だまつて見てゐるわけはありません。

『らんばうだ。』

『弱いものいぢめをしすぎる。』

ドイツ人は、拳こぶしをにぎつて、フランスの空をにらみました。くやしく

て、泣きだしたものもありました。けれども大戦のために貧乏になつたドイツには、ろくろく鐵砲も大砲ありません。軍隊もわづかな人數ですし、それに食物にも困つてゐたくらゐですから、フランスを相手に戦争することなどは、思ひもよらぬことだつたのであります。

『さんねんだが、しかたがない。がまんするのだ。』

總理大臣クノーは、國民にむかつて、かうなだめました、どこまでも反對する者が、すくなくありませんでした。大戦に奮戦ふんせんしたルーデンドルフ將軍も、その一人です。ヒットラーも、またその一人でありました。

ルーデンドルフ將軍と、ヒットラーは、あるところで、こつそりあつてから、クノー政府をたふす相談をしました。二人は、フランスのらん



ばうなしうちを話しあひました。ドイツをりつばな國にして、らんばうなフランスにしかへしをしなければならぬ、かう相談しました。

二人の考へは、ぴつたりと合ひました。クノーのやうな意氣地なしの大臣をやめさせて、もつと強い、しつかりした人を大臣にし、力のある政府をつくらうとまで、約束しました。二人は、いろいろな方法をめぐらして、時をまつてをりました。

そのうちにも、ヒットラーは、毎日のやうに演説會をひらいて、政府のやりかたのまづいのを攻撃こうげきしました。ドイツ人は立ち上らなければならぬと、聲をからして演説したのであります。

ヒットラーの演説は、新聞にのつて、ドイツ中に知れわたりました。

(ヒットラーは、かならずドイツを救ふにちがひない。)

ドイツの人人は、さう思ひました。

ミュンヘンへは、東から西から、ヒットラーと同じ考へをもつ人人が大ぜい集つてまゐりました。すると、ここにもまた、共産黨員が、もぐりこんできました。ヒットラーやナチスのじやまをするためだつたのです。

愛國者たちは考へました。ぐづぐづしてゐれば、ミュンヘンの人が、共産黨にだまされてしまふかも知れません。そこで、共産黨よりも先きに、人人に愛國者の考へを知らせて、みんなの心をそろへさせなければいけないと思ひました。

愛國者たちの骨をりて、十一月八日の晩、ビュルガアブロイ廣場で、市民大會がひらかれることになりました。すこし寒い日でしたが、集る



人たちは、ドイツを思ふ心でいつばいですから、寒いとも思ひません。あとからあとからつづいた人の列は、たちまち會場をうづめてしまひました。

會がはじまつて間もなくのことでした。どこからともなく、八臺のトラックが會場めがけて走つてきたかと思ふと、ぴたりとまつて、カーキ色の服を着た若者が、いなごのやうにとびおりました。そして、あつといふ間もなく、ぐるりと會場をとり巻いてしまつたのです。

『ナチスだ。』

『突撃隊だ。』

人人は、口口にいひました。

その通りです。ナチスの突撃隊です。しかも、まつさきに立つたのは

短い口髭<sup>ひげ</sup>に、一目にそれとわかる、ヒットラーではありませんか。

ヒットラーは、突撃隊を左右にしたがへて、さつと會場の入口をかける上りました。

人人は、何ごとが起つたのかと思つて、うしろを振り向きました。人人の目に、突撃隊員のすがたがうつりました。

『何しにきたのだらう。』

かういつてゐる、そのときでした。

バン、バン。

ピストルの音が、ひろい會場にひびきわたりました。見れば、ヒットラーの持つたピストルから、すうつと、煙が出てゐるではありませんか。ほかの隊員の手に、ピストルがぎらぎらと光つてゐるのでした。



『静かに、静かに。』

ヒットラーはいひました。そして、身ををどらせて、演壇<sup>えんだん</sup>へかけ上つたのでした。ほかの隊員のピストルは、ヒットラーをかばふやうに、演壇につつ口を向けてをり



ます。

ヒットラーは、

會場をにらみ

まはしてい

ひました。

『騒<sup>さわ</sup>いではい

けない。われわれ

ナチスは、今晚の會をつぶ

しにきたのではない。騒ぐものには、ピストルがある。外には六百人の

隊員がある、機關銃<sup>きくわんじゆう</sup>もある……。』

會場は、あまりのことに、たれ一人物をいふ者もなく、しんと静まり





かへりました。

ヒットラーは、そこにゐたフォン・カール將軍の前へ、つかつかと近よつて行きました。

『閣下にお話したいことがあります。どうぞこちらへ。』

先きに立つて、奥へはいつて行くのでした。フォン・カールは、ヒットラーにつづきました。その後から、ロツソー將軍、ザイセル大佐もつづいて、別室へしりぞきました。

何ごとか起つたのでせう。ヒットラーは、何のために、こんなことをしたのでせう。會場にゐた人には、すこしもわかりませんでした。が、間もなく、そのわけがわかりました。

ヒットラーが、ふたたび演壇にあらはれたからです。フォン・カール

もロツソーもザイセルも、あんしんしたやうな顔を見せました。

『ドイツ國民諸君。』

演説にのぼつたヒットラーは、まづ叫びました。

『われわれドイツ國民は、五年前の今日、われわれ國民を、今日のやうな苦しい立場にした政府をわすれない。今日かぎり、大統領エーベルトを免職かんしよくにする。諸君、エーベルト政府はたふれたのです。』

その聲が、をはるかはらぬうちに、會場には、わつと、ときの聲があがりました。集つてゐた人人が、ヒットラーの言葉に、大賛成だいさんせいだつたからであります。

『新しい政府が、いまでき上つた。統監とうかんはフオン・カール閣下かくか、首相

はプエナー閣下、國防軍司令官こくぼうぐんし れいくわんロツソー將軍、警視總監けいし そうかんザイセル大佐。



國防軍總指揮官くわうくわんさうしきくわんにはルーデンドルフ閣下をお願いした。』

わつ、といふ聲が、またわきあがりました。

『まだある。』

ヒットラーの聲は、獅子ししのほえるやうでした。

『アドルフ・ヒットラーは、ただいまから、ドイツの總理大臣となる。

ヒットラーは、ドイツを今日のやうに苦しめた國民の敵を、どこまでもやつつけるのだ。諸君は、私を信用してほしい。』

拍手はくしゆが起りました。

『ハイル・ヒットラー。』

破れるやうな叫びでした。

いつの間にか、ルーデンドルフ將軍の姿もあらはれました。人人は、

將軍を見ると、また叫び、拍手をくりかへして、夢中になつてしまひました。

フォン・カール將軍は、ゆつくりした調子で、演壇に上りました。

『諸君。フォン・カールは、ドイツのために、力かぎり働くことをちかひます。』

すると、ヒットラーが、カールの前に進んで、いひました。

『ドイツ國民は、閣下にお禮を申し上げます。』

つぎに、ルーデンドルフ將軍が、演壇に上りました。將軍は重々しく口をひらいて、ドイツ國民のかくご、ドイツ人のしなければならぬ大事なつとめについて、おごそかにいひわたしました。將軍の話がすすむにしたがつて、人人は目をかがやかし、手に力こぶをいれないではゐられ



ませんでした。なにもかも、將軍のいふとほりだつたからです。人人は思ひました。

（この將軍の下で、われわれドイツ人は、もいちど立ち直るのだ。方法は、ヒットラーが教へてくれる。二人をたより、二人の言葉にしたがつてゐればよいのだ。）

將軍の言葉は、火をはくやうにつづきました。

『では諸君。力かぎり、根<sup>こん</sup>かぎり、ドイツのためにつくさう。働かう。われわれの、まことある正しい精神には、神も味方されるであらう……。』  
將軍が演壇を下りると、ロツソーとプエーナが立つて、あいさつをしました。そして、三たび、ヒットラーが進み出しました。

『今日から、新しいドイツがはじまるのだ。名譽<sup>めいよ</sup>あるドイツ國歌を歌は

う。』

まづ、ヒットラーが歌ひだしました。ルーデンドルフ將軍の唇も動き  
ました。

みんなは立ち上りました。そして、腹の底から歌ひました。

ドイツよ ドイツ すべての上に

世界をあげて すべての上に

會場も破れよと歌ふ聲。その聲は、ドイツの新しい出發を祝ふ、國民  
のよろこびの合唱がっしやうだつたのであります。

「わ が 闘 争」

ドイツの新しい政府は、かうしてできあがりました。ヒットラーの血



のてるやうな苦心で、できあがつた政府です。ビュルガアブロイの會場の國歌は、たちまちドイツ國中へ、ひろがつて行つたのです。國民は、ルーデンドルフ萬歲、ヒットラー萬歲をさけびましたが、その夜のうちに、また大事件だいじけんが起つたのでありました。

フォン・カールが裏切つたのです。カールは、ヒットラーの前では、新しい政府に賛成さんせいし、統監とうかんになる約束をしておきながら、ヒットラーと別れて、會場を出ると、その足で、ミュンヘンの聯隊へかけこんだのでした。

『ヒットラーとルーデンドルフとて、政府をたふさうとしてゐる。市民大會で、ヒットラーはいつてゐた。いまの政府はドイツの敵だ、ほんとの政府は自分たちの政府だ、と。そして、ヒットラーは自分から總理大

臣だといった。』

フオン・カールは、ドイツ中へ、ラジオでそのことを放送したのでありました。これではまるで敵です。ナチス突撃隊の若者は、かつと怒りました。

『フオン・カールは、にくい裏切者です。このままにしておけば、ナチスは、かならず政府にねらはれます。どうなさるおつもりですか。』

若い突撃隊は、ヒットラーの命令をまちました。しかし、ヒットラーは騒さわぎません。

『フオン・カールは裏切つても、ドイツ國民は、われわれの味方だ。騒いではならぬ。突撃隊は武器ぶきをすてて行進せよ。』

ああ、その言葉。どこまでも、ドイツ國民を信じたヒットラーだつた



のです。

ヒットラーにそむく者は一人もありませんでした。鐵棒をすて、腰のピストルをはづした突撃隊は、ゐせいよくミュンヘンの町を行進しました。

先頭にはためく、ハーケンクロイツ。はればれとした、ヒットラーの姿！

そのとき、フォン・カールのつげ口で、これを知った政府は、警官をかり集めて、町の角角<sup>かどかど</sup>にかくしておいたのです。

ヒットラーを捕へよ。ルーデンドルフを捕へよ。

警察からは、かういふ命令が出てゐたのでありました。

警官隊は、たちまちをどり出て、ヒットラーとルーデンドルフ目がけ

で、つき進んできました。

突撃隊は、ヒットラーとルーデンドルフの前に、ひとがき人垣をつくつてふせぎました。けれども、ヒットラーの命令で、ピストルも、鐵棒も持つて來ない突撃隊でした。いくら強くても、すて素手では、ピストルをもつた者に、勝つことはできません。ピストルがなるたびに、突撃隊員は路の上にあたふされました。

ルーデンドルフ將軍までが、うで腕のあたりを傷つけられたらしく、服の上に、血のながれるのが見えました。

ヒットラーの耳もとを、ヒューツと、弾がとんで行きました。

『早く。いまのうちです。』

突撃隊員は、ヒットラーにいひました。



『しんばいするな。ヒットラーの身體からだに、臆病者おくびやうものの彈たまがあたるものか。』

ヒューツ。また、彈がとんできました。

『危あぶない。』

ヒットラーの服をかすつてとんだ一發の彈丸は、この騒ぎに逃げおくれた、一人の少年をきずつけました。

『どうした。』

ヒットラーは、少年のそばへかけよつて、たふれた少年を抱だき上げました。少年の足から、ぼたぼたと血がしたり落ちてゐます。

ヒットラーは、子供が大好きでありました。ことに子供は、つぎのドイツの國民です。大きくなつてから、ドイツのためにはたらく、だいじな國の寶たからです。ですから、ヒットラーは、子供を大切にしました。

少年がけがをしたのを見ては、そのままにしておくわけにはいきませ  
ん。

『がまんするのだ。すぐ醫者につれて行つてやるぞ。』

ヒットラーは、少年を、自動車にかつぎこみました。

『この少年は、私が醫者へつれて行く。』

いったかとみるまに、自動車は、敵味方のはげしい争ひの中をくぐつ  
て、矢のやうに走り去つてしまひました。

『小父<sup>をぢ</sup>さん。』

けがをした少年が、ヒットラーに、いひました。

『僕を救つてくれて有難う。小父さんは親切ですね。小父さんの名は何  
といふの?』



『小父さんかい。小父さんはね、アドルフ・ヒットラー。』

『えつ。小父さんが、ヒットラー小父さんか。僕、知つてますよ。ナチス、僕は大好きさ。』

少年は、うつとりと、ヒットラーを見上げました。

『さうかい。大きくなつたら、ドイツのためにつくしておくれ。小父さんが、よくたのんだよ。』

ヒットラーはやさしく、少年の腕<sup>うで</sup>をさすつてやりました。

ある病院の前へくると、ヒットラーは、自動車をとめ、少年を横抱<sup>よこだ</sup>きにして、とんとんと石段を上つて行きました。

『この少年をたのむ。』

醫者の手へ、ヒットラーは、一つかみの金をわたすと、醫者が何かい

ふのをきくひまもなく、表へとび出してしまひました。もう自動車にはのりません。横町の細い露路ろぢの中へとびこんで、露路から露路へ、追ひかけてくる警官の目をくらまして、遠くへにげて行くのでありました。

南へ、南へ。ヒットラーは、夢中で走つてをりました。捕へられたくない心でいつばいでありました。けれども、身體はだんだんつかれてきます。足は棒のやうに重くなり、手は他人のもののやうにだるくなつてきました。それに腹がすいて、呼吸いきするのも苦しくなりました。

何時間かのちに、ヒットラーは、ある百姓家の前に立つてをりました。トントン、トントン。

ヒットラーは、戸をたたきました。

『おう誰だ。いま開けるよ。』



家の中から聲がして、大きな男がぬつと顔を出しました。男は、見たこともないヒットラーの姿に、首をかしげました。

『あんたは、どこから來たのだね。』

『ミュンヘンから來た者だ。』

ヒットラーは、正直にいひました。うそをいつてはいけない、ほんとのことを話して、この百姓にたすけてもらひたい。かう思つたからであります。けれども、ゆだんはできませんから、じつと相手のやうすをうかがひました。

『ミュンヘンは、えらい騒さわぎだといふことてねえか。』

男は、戸をあけながら、

『どんな騒さわぎがあらうと、わしらは何にもしらねえこつちや。まあ、こ

ちらへおはいりなさい。』

さういつて、ヒットラーを中にいれましたが、しばらく考へてから、家を通りぬけて、裏にある、納屋<sup>なや</sup>へつれて行きました。

『きたないところだが、この方が静かでよいでがせう。何か食物をもつてきますから、ゆつくりなされ。』

男は、食物をとりに行きました。ヒットラーは、涙ぐんだ目で、そのうしろ姿<sup>すがた</sup>を見送つたのであります。

（あの男は、私をナチスだと知つてゐるらしい。ひよつとすると、ヒットラーだといふこともわかつてゐるのではないか。ヒットラーは、政府のおたづね者で、警官に追はれてゐるのだ。それなのに、親切にしてくれる。有難う。ヒットラーは、けつしてこの親切をわすれない！）



ヒットラーは、心のなかでいひました。

男は、あたたかいスープや、焼きたてのパンを運んできて、ヒットラーにすすめました。

『まづいものばかりだが、たくさん食べて下さい。足らなかつたら、私の分も、もつてきますだ。ははははは。』

スープをすすり、パンを食べながら、ヒットラーは、胸のなかで、熱くなるやうな氣もちになりました。

『食べたなら、そのベッドでおやすみなさい。ここへは、たれも來させることぢやありません。朝まででも、晝まででも、ぐつすり眠れますだ。』

につこりして、男は出て行きました。一人になつたヒットラーは、ベ

ッドに横になりましたが、なかなか眠れません。警官隊とのものすごい争ひが、ありありと目に浮んでくるのでした。フォン・カールにくい裏切り。勇しい突撃隊の働き。ぐるぐると、頭の中でまはる、その日のこと――。

（將軍はどんなされたらう。）

ルーデンドルフ將軍のはげしく怒つた聲が、すぐそばに聞えるやうな氣もしました。

ずきんずきんと右手が痛むので、腕をしらべてみると、あかくはれあがつてをります。争ひのさいちゆうに、路へみちころんだとき、石かなにかにあたつたのでせう。

ヒットラーは、そつと、腕をふつてみました。納屋なやには、火がないせ



いか、ぞくぞくと寒くなってきました。

がさつ。音がしました。ヒットラーは、立ち上つて、戸口から表をのぞいてみました。たれも

來たやうすはあ

りませんが、

ちらちらと

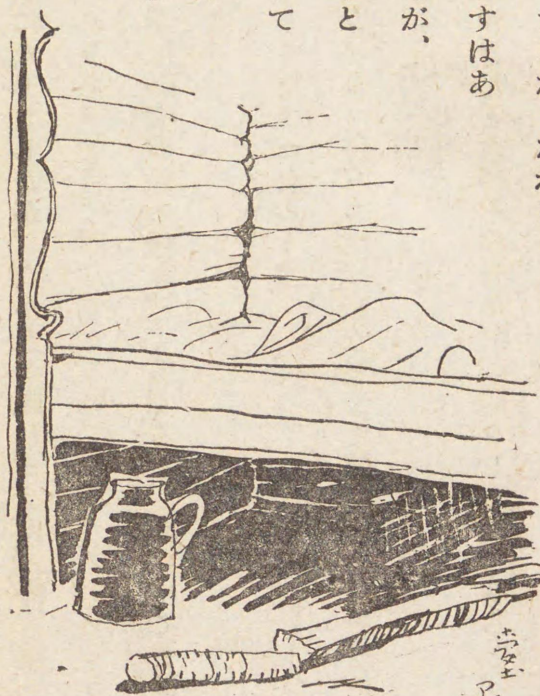
雪のふつて

ゐるのが

見えまし

た。く

らい空



から、  
雪は音  
もなく  
ふつ  
てゐ  
る





のでありました。

ヒットラーは、またベッドへもどりました。そして、静かに目をつむりました。

(こんどは失敗した。ヒットラーは負けた。しかし、おしまひには、かならず勝つ。それまで、がまんしなければいけない。こんなふうに、逃げ歩いたところで、いつまで逃げられるものではない。朝になつたら、いさぎよく警察へ名のつて出よう。)

ヒットラーは、かうかくごしました。すると心がおちついて、いつかぐつすりとなついてしまひました。

朝になると、ミュンヘンの警察から、大ぜいの者がきて、納屋の戸をあけました。ピストルを手にして、いざといへば撃つぞ、といふやうな

身がまへでした。

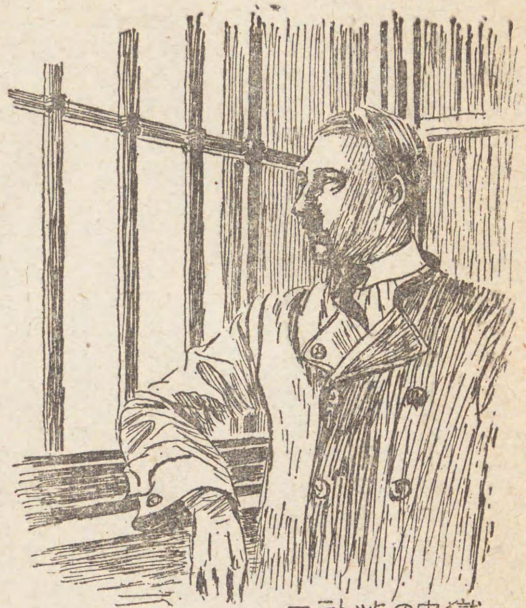
『とうとうやつてきたね。ごくろう。』

ヒットラーは、きちんと服を着て、納屋の中に、笑つて立つてをりました。警官は、ヒットラーを引き立てました。ヒットラーは、百姓家の主人に、

『いろいろ親切にしてくれて、有難う。いつかまたお目にかからう。』  
と、いひました。

ヒットラーは、その言葉をわすれませんでした。ドイツの總統（総統）になつてから、この百姓家をたづね、あつく禮をいつた上、自分のところへつれ歸りました。いま、ヒットラーのそばで、身のまはりのことや食事の世話をしてゐるカンネンベルグといふ人が、この百姓家の主人でありま





獄中のラットー

す。

ルーデンドルフ將軍も  
とらへられました。ゲー  
リングも、ヘスも、ナチ  
スのおもだつた人は、大  
ていとらへられてしまひ  
ました。

ヒットラーは裁判所へ

さいばんしょ

まはされて、翌年の三月  
三十一日に、五ヶ年の刑をいひわたされました。もつとも五ヶ月で假出  
所といふことにはなつてゐましたが、それまでは自由になりません。ラ

ンズベルグ刑務所けいむしょのつめたい部屋に、とちこめられたのでありました。黨員のヘスもいつしよでした。

忙いそがしかつたヒットラーには、刑務所のくらしが、たいくつでたまりませんでした。

「いかがです。ナチスのことや、ナチスの精神を、本にお書きになつては。」

ヘスが、ある日、かうすすめました。

「本もよいが、本よりも、私は演説のはうがすきだ。演説のはうが、人の心を動かすにはよい。」

ヒットラーはいひました。

「でも、刑務所では、演説はできません。ぜひお書きなさい。私も筆記



くらゐは、お手傳ひしませう。』

ヘスは、しきりにすすめました。ヒットラーは、なかなかききいれませんでした。あまりねつしんにすすめられるので、とうとう書くことにしました。子供のことや、ナチスの運動をはじめてからのことなどを、くはしく書きました。これが、有名な「わが闘争」といふ本であります。この本は、ヒットラーの名とともに、世界の國國へひろまり世界の人から、愛讀あいどくされてをります。

## ドイツの夜明け

五ヶ月といへば、わづかな間です。けれども、ヒットラーには、ながいながい五ヶ月でありました。

ランズベルグの刑務所けいむじょを出たヒットラーは、より道もしないで、まっすぐにミュンヘンへもどつてまゐりました。

『ヒットラーがもどつたさうだ。』

『ぢや、またなにかはじめるだらう。』

ミュンヘンの人人は、よるとさはると、ヒットラーのうはさをしました。けれども、ヒットラーは何もしないのです。どこにゐるかさへもわかりません。

『ヒットラーは、共産黨に負けてしまつたのだ。』

『ナチスもおしまひだ。ヒットラーは、生れた國のオーストリアへ、歸つたといふではないか。』

こんなうはささへありました。



ところが、ヒットラーは、オーストリアへなど歸りません。ナチスをやめるところか、一生けんめいに黨員を集めて、じつとときを待つてゐたのです。

時は、たちまちのうちに、きました。いきなりナチスの演説會のビラ

が、町町にとびちりま

した。大きなポスター

が、塀<sup>へい</sup>やかべに、人人の

目をそばだてました。

『やつた。やつぱり、

ヒットラーはえらい

ぞ。』



ミュンヘンの町は、

あらしても来るかのや

うに、ヒットラーの評

判が高くなりました。

演説會場のホフブロイ

ハウスには、一萬人か

らの人が押おしよせてき

ました。二千人しかは

いれない會場に三千人

もいれましたが、外に立つてゐる人は、その倍よりも多いといふ騒さわぎで  
す。





カーキ色のナチスの制服を着たヒットラーは、久しぶりで演壇に立ちました。

『諸君。』

と叫ぶ聲にもかはりありません。前よりも、がつちりと強さうになり元氣いっぱいでありました。その話には、人人の心を、腹の底からゆりうごかす、強い力がありました。

『ハイル・ヒットラー。』

人人は、この叫びを思ひ出しました。

『ハイル・ヒットラー。』

その聲は、町といふ町に、こだまのやうに、ひびきわたつたのでありました。その日から、突撃隊の若者が、町に姿をあらはしました。また

ヒットラーの、自動車にのつて、いそがしくどこかへ出て行く姿も見えました。町の人が、右手を舉<sup>あ</sup>げて、『ハイル・ヒットラー』と叫べば、ヒットラーも、右手を舉げて、これに答へました。

ヒットラーとナチスの勢ひは、たちまちもとのやうに、盛んになりました。

翌年の六月六日の大會には、一萬人からの黨員が集りました。この大會へ出るために、ルール地方の坑夫<sup>かうふ</sup>たちは、トラックにのつて、ミュンヘンまでかけつけてきたくらゐです。ルールからミュンヘンまでは、トラックで走らせても、四十時間もかかるほどはなれてゐるのです。こんな遠いところから、黨員がくるといふのは、ナチスに信用があつたからです。ヒットラーのほかに、ドイツを救ふものはないと、みんなが思



つたからであります。

ニュルンベルグの大會にも、大ぜいの黨員が集りました。その數は、十萬人あまりで、ドイツでも、はじめてのことだといはれました。

ミュンヘンに起つた、「ヒットラーあらし」は、かうして、ドイツのすみからすみまで、吹きまくつたのであります。

ヒットラーは思ひました。

（ドイツの政治をよくするためには、ナチスの政府をつくらなければいけない。それには、議會へ代議士だいぎしを出すのがもつともよい。）

そこで、ナチスは、代議士の選舉せんきよに候補者こうほしやを立てました。ナチスの演說會が、ドイツ中にありました。ハーケンクロイツは、ドイツのすみまでひるがへつたのです。

第一回の一九二八年の選挙には、ナチスから、代議士が十三人だけ出ました。一九三〇年には、百七名の代議士が出ました。一度に百人ちかくふえたので、ナチスのなかには、夢中になつてよろこぶ者もありましたが、ヒットラーは、ゆだんしません。

『まだほんとに勝つたのではない。われわれのたたかひはこれからだ。』  
ヒットラーは、かういつて、黨員を上げました。

ナチスの勢ひが強くなるのを、よろこばないものもありました。その第一は共産黨です。共産黨では、何とかしてナチスのじやまをしようと相談した末に、おそろしいことを考へました。ヒットラーを殺してしまはうといふのです。

『ヒットラーがゐなくなれば、ナチスの力はおとろへるにちがひない。』



目ざすのは、ヒットラー一人だ。』

共産黨のらんばう者は、ピストルに手をかけて、ヒットラーのすきをうかがつてゐたのでありました。

一九三〇年のある日です。

ヒットラーは、ゲッベルスとつれ立つて、ナチスの本部を出ようと思いました。ナチスの本部は、ベルリンにあつたのです。ヒットラーも、そのころは、ミュンヘンを去つて、ベルリンにきてゐたのです。

『あつ。』

ゲッベルスがいつて、一歩さがりました。

ほとんど同時に、

パン。

ピストルが鳴りました。入口の物かげから、一人の男がよろめき出て  
ばつたりたふれました。と同時に、突撃隊員の一人が、まだ、筒口から  
煙のでてゐるピストルを右手に、かけよつてまゐりました。

「閣下、おけがは。」

ヒットラーは、さういふ突撃隊員に、につこりして見せました。ゲッ  
ベルスも、笑ひ顔を、ヒットラーと見合せました。二人とも、かはりは  
なかつたのです。こんなことがたびたびあるので、ヒットラーやゲッ  
ルスには、いつも突撃隊の見張りがついて、まちがひのないやうに守つ  
てゐたのです。ヒットラーを撃たうとした男は、ヒットラーを撃つ前に  
見張りの突撃隊員のため、自分が撃たれてしまつたのです。

突撃隊員は、たふれた男をしらべてから、



「閣下、共産黨員です。入口をうろついてゐるやうすがをかしいので、  
ゆだんなく見張つてゐたところ、ピストルを出したので、こちらからや  
つつけたのですが、やつぱりさうでした。」

と、

いひ

まし

た。

「ひ

けふな

奴です。」

若い突撃隊員は、



にくにくしげに、口をとがらせまし

た。ヒットラーは、たふされた共産黨員

を、じつと見つめてをりましたが、やがて

ふつと、ため息<sup>いき</sup>をはきました。

「かはいさうに。君は共産黨のために、勇し

く戦死したのだ。共産黨が正しい考へのもの

なら、りつばな戦死だといへよう。しかし共産

黨の考へはあやまりだからいけない。君が死を

おそれぬ心で、名譽あるドイツ人として働いてく

れたのなら、どんなによかつたらう。をしいことを

した。なぜドイツのために死んでくれなかつたのだ。





美しい死花をさかせなかつたのだ。』

かなしい、ふりしぼるやうな聲で、ヒットラーはいひました。ゲッペルスは、だまつて顔をふせました。若い突撃隊員も、うなだれてしまひました。

自分を撃たうとした敵でも、ヒットラーはにくまなかつたのです。勇しい行ひにはかんしんしたのです。まちがつた考へををしいと思つたのです。かういふやさしい心があればこそ、味方の者は、ヒットラーのためには、よろこんで死ぬ氣になるのであります。

一九三二年（昭和七年）の選挙せんきょには、ナチスの代議士が、二百二十九名になりました。ハイル・ヒットラーの聲は、山も河もゆるがすやうに、ドイツ中へとどろきわたりました。

一九三三年一月  
ヒンデンブルク・ヒットラー會見

この

やうに、大ぜ

いの代議士がえ

らびだされたと

いふことは、ド

イツ國民が、ナチ

スとヒットラーを信

用したからであります。



五五五



このときドイツの大統領は、ヒンデンブルグ元帥でありましたが、元帥は、ヒットラーを總理大臣にして、内閣をつくるやうに命じました。一九三三年の一月であります。

ヒットラーは、すぐに内閣をつくりましたが、そのなかにはゲーリングも加つてをりました。じつに、ヒットラーが、ミュンヘンの「六人クラブ」へはいつてから、ちやうど十三年目。とうとうヒットラーは、ドイツのために、ドイツの總理大臣になることができたのであります。

ドイツ國內には、號外の鈴がリンリンなつて、ヒットラー内閣のできたことを知らせました。ラジオの聲は、世界中に、このできごとを送りました。

ナチス黨員は、ハーケンクロイツを高くかざして、町町をねりある。

きました。町の人人も、これに加はりました。

その夜、ベルリンの首相官邸前には、幾萬人の人が集つて、ドイツ國歌をうたひつづけました。

ヒットラーは、官邸の<sup>くわんてい</sup>高いところに出て、人人のよろこびをうけました。

『ハイル・ヒットラー。』

『ハイル・ヒットラー。』

いつまでも絶えない人人の聲です。そのたびに、ヒットラーは、さつと右手を舉<sup>あ</sup>げて、ナチスの敬禮<sup>けいれい</sup>をするのでした。

（ドイツ國民諸君。ヒットラーは、かならずドイツを力強い國にします。國民諸君も、ヒットラーと同じ心になつて、せい**い**つばい、力**い**つばい



ドイツのためにつくして下さい。

ヒットラーは、心のうちに叫びつづけたのでありました。

### ハイル・ヒットラー

ヒットラーが、内閣をつくつて、政治をとるやうになつてから、ドイツはすっかりかはつてしまひました。理窟<sup>りくつ</sup>やで怠<sup>おろそ</sup>け者のマルクス主義者と、慾<sup>よく</sup>ばりのユダヤ人は、どしどし外國へ追ひやつてしまひました。共產黨も消えてなくなり、のこつたのは、心からドイツのためを思ふ、しつかりしたドイツ人ばかりになりました。ヒットラーは、ナチスのえらい人でも、ドイツのためにならない人は、ゑんりよなく、役をやめさせました。

ヒットラーの心の中は、ドイツのことばかりです。ドイツ國民の心の中にあるのも、ドイツのことです。ドイツを正しい強い國にし、世界を公平に平和にしたいといふのが、ヒットラーののぞみなのであります。

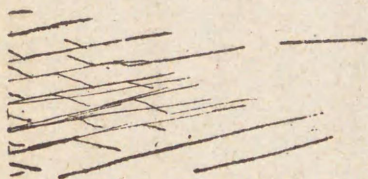
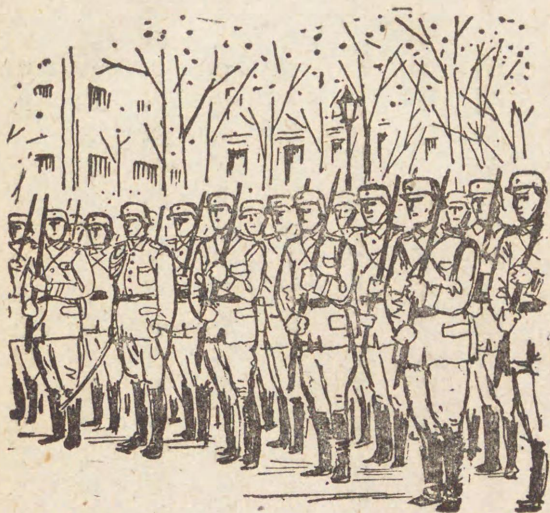
大人ばかりではありません。ドイツの子ども、みんな同じ心です。ドイツの少年たちは、ヒットラー・ユーゲントといふ少年團をつくつて、ヒットラーのやうに、國のためになるりっぱな人にならうとしてをります。

ヒットラー・ユーゲントは、よいドイツ人になるために、精神と身體を鍊<sup>きた</sup>える少年團です。學問もしますが、運動もします。百姓のすることも職工のすることも、そのほか何でもして働きます。力いっぱい働き、身體を丈夫にして、どんな苦しいこと、つらいことにも負けない、精神と身體とを、つくつてゐるのであります。



ヒットラーは、ヒットラー・ユーゲントを大切にし、ヒットラー・ユーゲントの大会に、いつも出かけて行き、少年たちと、仲よく楽しげに話をしてをります。

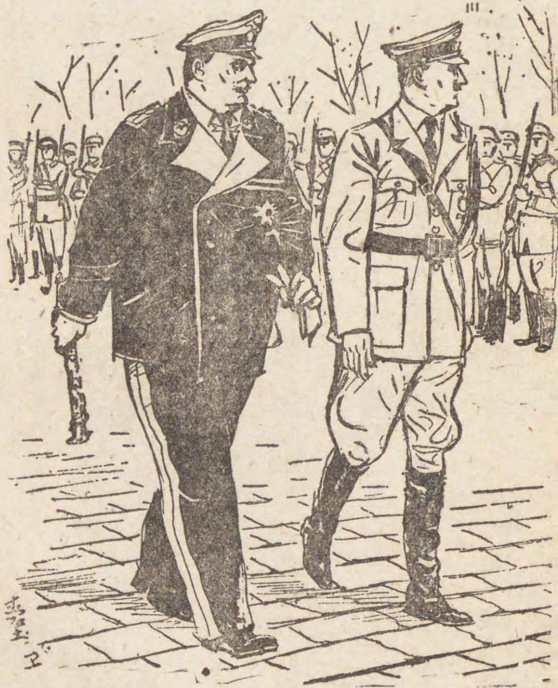
『君たちは、大切なドイツの寶だ。<sup>たから</sup>しつかりやつてもらひたい。』  
さういふとき、ヒット



ラーのうれし  
さうな顔を見  
た人は、ヒッ  
ラーは、ほと  
にやさしい人だ、  
とかういつてを  
ります。

ドイツは、か  
うしてたちまち、ヨ

ロッパ一の強い國になりました。軍隊も強く、なかでもゲーリング元帥のひきゐる空軍は、世界に有名であります。





一九三九年九月一日。ドイツはポーランドと戦争をはじめました。ポーランドのうしろには、イギリスとフランスがついてゐて、ポーランドをけしかけたともいわれます。

戦争のはじまつた九月一日の前の夜でした。ヒットラーは、ただ一人で、ベルヒテスガーデンの別荘べつさうにひきこもつて、まんじりともせずを考へてをりました。この別荘は、ヒットラーのいちばんすきなところですよ。別荘は高い山の上にあり、そこから、美しい景色が、手にとるやうに見えるのです。

山山には、木が茂り、小徑みちがありました。道には、小さな草花がさきみだれ、まつ青な空がひろびろと、山をつつんでをります。ヒットラーは、何か大事なことを考へるときには、いつもこの別荘にきて、たれと

も會はずに、じつといく日でも考へつづけるのでありました。

窓のそとでは、小鳥の歌つてゐるのが、何ともいへず平和に聞えてをりました。

ヒットラーは、額をおさへて考へこみました。眞向ひには、ビスマーケの畫像が、じつとこちらを見つめてをります。

(どうしてもだめなのか。戦争をしなければならぬのか。)

ヒットラーは、口のなかでつぶやきました。

戦争はよいことではありません。戦争をしないですむなら、こんなよいことはないのですが、しないではすまないこともあります。ドイツは戦争をしなくてはすまないときになつてゐたのでありました。

一晚中、考へに考へたヒットラーは、朝になると、ペンをとり上げて



ポーランドへ進軍せよ、といふ命令を書きました。九月一日午前五時十分でありました。

まもなく、ヒットラーはベルリンにもどつて、議會で、火のてるやうな、はげしい演説えんぜつをしてをりました。ポーランドとの戦争についての演説であります。

『諸君。』

と、ヒットラーの言葉は、人人の胸をさすやうにするどくひびきました。ヒットラーは、どうして戦争になつたかといふことを、よくわかるやうにくはしく話しました。それから、一だんと聲を張り上げました。

『私は今日から、ドイツの一兵士となつて、兵とともに行くことにした。この前の世界大戦では、私はいのちかぎり戦つた兵隊だつた。こんども

同じ決心をした。いま着てゐるこの私の服は、戦争がをはるまで、けつしてぬがない。にくむべき平和の敵をたほし、最後の勝利が、わがドイツの上にかがやくまで、ヒットラーは、この服を着るであらう。』

ヒットラーは、胸をさしていひました。

ヒットラーの着てゐる服は、伍長の軍服だつたのです。この前の世界大戦に、伍長だつたヒットラーは、こんどもそのときと同じ心で出征するため、わざわざ伍長の服を着たのでありました。總理大臣も一兵卒も、同じ心になれといふことを、人人にしらせるためであります。

それから二日目の夜でした。ポーランドへ、ポーランドへ——と進軍するドイツ軍のなかを、ハイル、ハイルの聲をあびて、まつしぐらに走る、一臺の自動車がありました。



自動車の上には、につこり立つたヒットラーがゐたのです。ヒットラーは、議會で約束したやうに、自分がまつさきに戦線へむかつたのであります。夜目にもそれとわかる伍長の服が、ドイツの兵隊には、光りがやく大將の服よりもりつばに見えました。

ポーランドが、ドイツに降参かうさんしたのは、その後、間もないことであります。フランスが、ドイツ軍のために、マジノ線をやぶられ、パリーまで攻めこまれたのは、その翌年の一九四〇年の春でありました。さうして、ポーランドはドイツ領となり、フランスは、ドイツと媾和かうわしました。このころのはイギリスです。それからロシヤです。

ヒットラーは、敵國の空をにらんでをります。ゲーリング元帥のひきゐる、ドイツ空軍は、ポーランドでは、落下傘部隊らくかさんぶたいを用ゐて、敵をうち

ほろぼし、世界をおどろかせました。またイギリスとの戦争では、ロンドンのまん中へ、しきりに爆弾をふらせてをります。またドイツがじまんの大きな大砲は、イギリス海峡かきせうの波をとびこえて、イギリスの本土へ飛んでをります。

一九四〇年の秋。日本は、ドイツと同盟國どうめいこくになりました。そのあとでドイツと仲のよいイタリイも、同盟のなかまにはいりました。三つの國は、しつかりと手をにぎつたのです。三つの國の目的もくてきは、古い世界のわるいところをこはして、新しい、住みよい、世界をつくらうといふのであります。

ドイツの子供たちは、同盟國日本を、みんな大好きです。日本のことを知りましたが、つてをります。ヒットラー・ユーゲントが、わが國へきたこ



ともあります。

『君たちの、いちばん愛するものは。』

ヒットラー・ユーゲン

トの少年に、かうきい

てごらんなさい。ヒツ

トラー・ユーゲントの

少年は、きつとつぎのや

うに答へるでせう。

『ドイツ。』と。

『では、君たちのいちばんえら

いと思ふ人は？』



『ヒットラー。』

きつと、かう答へるでせう。

ドイツの子供は、ヒットラーを  
尊敬し、ヒットラーのいふままに  
したがつてをります。さうすれば、  
ドイツのために役に立つりつばな  
人になれると信じてゐるからであ  
ります。

ドイツの子供が、いちばんうれしさうに叫ぶ  
言葉は、きまつてをります。

『ハイル・ヒットラー。』





そして、右手を高くさしのべるとき、ドイツの子供の目は、いきいきと輝くのであります。

## あとがき

大東亞戦争だいとうあせんそうがはじまりました。ながい間、わが國のじやまをし、アジアの平和をかきみだしてゐたアメリカとイギリスを、こらしめるときがきました。

アメリカとイギリスを、アジアから、おひはらはなければなりません。アジアの平和のじやまものを、たたきふせなければなりません。アメリカとイギリスは、蔣介石しやうかいせきをけしかけて、わが國に戦争をしかけさせたのです。アメリカとイギリスをうたなくては、アジアは平和にならないのであります。

アジアばかりではなく、ヨーロッパも、アメリカとイギリスがあつて



は、平和にならないのです。この二つの國は、じぶんたちだけがよければ、ほかの國は、どんなにくるしんでもよいと考へてゐるのです。そこで、ドイツとイタリーも、アメリカとイギリスを相手あひてに戦ふことになつたのです。アメリカ、イギリスは、アジアとヨーロッパの敵です。世界平和の敵であります。

わが國は、アジアのため、世界のために、アメリカ、イギリスを、うちたふすために、立ち上つたのであります。どんな不便ふべんがあつても、いつまで戦争がつづいても、勝たねばなりません。アジアと世界を平和にするためには、一億一心、かくごをきめて、くるしみをがまんし、不便をしのびませう。

わが國の味方みかたになつた、ドイツとイタリーは、どちらも正しい國です。

強い國です。世界を平和にしようとしてゐる國です。そして、ドイツのヒットラーも、イタリーのムッソリニも、わが國と力を合せて、どこまでも進まうとしてをります。

同盟國どうめいこくドイツを、今日のやうな強い、りつばな國にみちびいた、ヒットラーは、どこが偉いのでせう。それはほかでもありません。子供のと  
きから、ドイツを強いりつばな國にすることばかりを、考へつづけたこ  
とです。よその國に負けない國にするには、どうしたらよいか。それば  
かり考へたことです。そして、ドイツを危くするやうな、わるい考へを  
もつた者とは、どこまでも戦ひました。いのちを的にして、争ひました。  
また、ドイツをいぢめようとする外國を、けつして怖れませんでした。  
堂々と戦ひました。いまでも戦つてをります。



ヒットラーのえらいところは、じぶんのことにかまはず、國のためにつくすことであります。よいと信じたことには、わき目もふらずに進むことであります。

ヒットラーがでてから、ドイツ國民の心は、一つになりました。一つになつた心は、強い力になります。ドイツが強いのは、そのためであります。ヒットラーの強い心と、國のための正しい行ひは、わたくしたちも學ばなければならぬと思ひます。つぎに、ヒットラーのしてきたことを、一目でわかるやうに書きならべてみます。

(西曆<sup>せいれき</sup>)

一八八九年 四月二十日、ブラウナウの町に生まる。

一九〇二年 十四歳。父死す。

一九〇四年 十六歳。母死す。美術學校<sup>びじゅつ</sup>の試験<sup>しけん</sup>にしつばい。

一九一二年 二十四歳。ミュンヘンにうつる。

一九一四年 世界大戦おこり、八月三日勇んで入隊。にふたい

一九一六年 十月七日、ソンムの戦ひで、名譽めいよの負傷ふしやうをうく。

一九一七年 三月、ふたたび出征。しゆつせい

一九一八年 十月三日、イギリスの毒ガスに、目ををかされる。

十一月十日、休戦きうせんとなり、ドイツは共和國きやうわこくとなつた。

一九一九年 九月十六日、ドイツ労働黨らうどうたうに入り、七人目の黨員となる。

十二月、ナチスの黨首たうしゆとなる。

一九二一年 げんきなナチス突撃隊とつげきたいをつくる。



一九二四年 警察に捕へられ、刑務所に入れられる。

一九二六年 七月三日、ドイツのこどもたちが、ヒットラー・ユーゲントをつくつた。

一九三三年 一月三十日、つひに首相となる。

一九三六年 十一月二十五日、日獨防共協定（共產主義を防ぐ

約束）をむすぶ。

一九三九年 三月十五日、チエツコを合併。

九月一日、ポーランドへ進撃。

九月三日、イギリス、フランスと開戦。

一九四〇年 六月十四日、ドイツ軍はフランスのパリに入城。

九月二十七日、日獨伊三國同盟をむすぶ。

一九四一年 九月二十七日、日獨伊三國條約のとりきめ。

一九四二年 六月二十二日、ロシヤに宣戰。

十二月十一日、日獨伊軍事同盟をむすび、アメリカに宣戰した。

かうして、ヒットラーは、わが國と足なみを合せ、正義のために、一生けんめいはたらいてをります。ですからドイツは、わが國の仲のよい友だちで、だいじな味方です。おたがひに、うんとぐわんばつて、ドイツを上げませう、かならずかならず、アメリカ、イギリスのわるだくみをうちやぶつて、アジアを、ヨーロッパを、そして世界を、すみよいところにするために、力をつくしませう。子供には、子供のできることが、たくさんあります。それをするのが、國のためになり世界の平和



につくすことになるのであります。

著  
者

昭和十七年二月十日 印刷  
昭和十七年二月十五日 發行



(版權所有)

(ヒツトラー)



定價一圓三十錢

著者

大木雄二  
おほき ゆうじ

發行者

齊藤嘉久  
さいとう けいこ

印刷者

矢澤留吉  
やざわ りゅうきち

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

發行所

東京市淺草區株式會社  
小島町一ノ七

金の星社

(會員番號二七五八)

電話淺草(84)五二六九番  
振替東京六四六七八番



# 我等の偉人の

「我等の偉人」刊行會

執筆同人

澁澤 青花

水谷 まさる

大木 雄二

日本國史中で眞に「我等の偉人」と稱せらるべき人々をえらんで、毎月一冊づつ發行する劃期的出版であります。執筆同人は何れも兒童文學の大家であります。しかも三氏とも、この意義深い仕事の完成に全力を擧げて没頭して居られます。

第一輯	白近山 瀬藤田 中重長 尉藏政
第二輯	坂間伊 本宮能 龍林忠 馬藏敬
第三輯	大勝吉 村田海 益松 次舟蔭
第四輯	頼平高 田山彦 山篤九 陽胤郎
第五輯	奥廣野 村瀨口 五百中英 子佐世
第六輯	伊東乃 藤郷木 博平希 文郎典
第七輯	野江中 川太郎 兼左藤 山衛門樹
第八輯	北名楠 島和木 顯長正 家年成

定價各冊 壹圓五拾錢 (送料 十四錢)

る さ ま 谷 水

# 美 談 教 室

型 6 B 一 二 頁 定 價 九 十 五 錢 送 科 十 錢

著者の言葉 美談はそれが事實であるといふ點に強味があることは、今さら強調するまでもないが、私はこれらの美談を兒童の學年に應じて理解されるやうに、そして力強く心に浸み入るやうに、あくまで興味のある物語として書いてみた。私の「美談教室」は、たのしく「自習する教室」でありたい。と同時に、「明るい日本の教室」でありたい。

一 の 卷	二 の 卷	三 の 卷	四 の 卷	五 の 卷	六 の 卷
生 一二年 向	生 二三年 向	生 三四年 向	生 四五年 向	生 五六年 向	生 五六年 向
「ウメズノ ヒノマル」シツンダ センスキテイ 「ナマケタ シユクダイ」テガラハ シブンデ 「イハニ ササツタ ヤ」ソノホカ	「いぐわの ごけんやく」國旗をかひに「馬の上のぬねむり」これが日本人「けがをした 大」まけぎらひの 子ども「そのほか十六のおはなし」最後の言葉「御大はやぶさ號」家にゐる時の元帥「算術きらひ」下駄にむかつて御禮「早い暗算」川に落ちた千鹿「その他十七篇	「ふしぎなお夢」乃木大將と宿屋「もぐら兄弟」日本某の輸出「ベルナルドのしたこと」人は一代名は末代「約束の松」その他十六篇	「奉安殿の材木」フランス公使の申し出「信淵の精神」思出の庭石「大熊を退治した少年」朱筆を入れた下圖「カーネギーの讀書」その他十七篇	「茂る瑞竹」前例のない拜讀「乃木靜子夫人と琴」「首席あらそひ」養育院の郡長さん「お友達はいんな親切」一京と蛤と兎「その他十八篇	



# 金の星・特選文庫

四六版函入・各二〇〇頁  
装幀挿畫は童畫大家の作

## 1 イソツプ物語

イソツプの中でも特に名高いお話ばかり集め、挿書を豊富に入れました。

定價八十錢  
送料十錢

## 2 ファール昆虫物語

有名なファールの昆虫の話は誰でも一度は読んでおきたいものであります

定價九十錢  
送料十錢

## 3 日本昔ばなし

日本の昔ばなしの中で名高い八篇です「竹取物語」「くらげのお使」その他。

定價八十錢  
送料十錢

## 4 日本英雄昔話

日本の英雄の事蹟と傳説を織りまぜて語り傳へられた勇ましいお話です。

定價八十錢  
送料十錢

## 5 日本童話集

我國に傳へられてゐる童話から特に面白いものを選んで一卷としました。

定價八十錢  
送料十錢

## 6 希望の少年

古今東西の偉人の生ひ立ち物語で特に読み物として興味深く書かれました。

定價一圓二十錢  
送料十錢

# 日本精神少年文庫

三島 霜川 著

## 1 川中島合戦

信玄が虎ならば謙信は龍でせう。  
この戦國の二英雄が、川中島で胸のすくやうな合戦をします。

定價 壹圓  
送料 十錢

## 2 關ヶ原合戦

天下を取るか取られるか、その瀬戸ぎはに、家康も三成もただ武士らしく力の限り戦ひました。

定價 壹圓  
送料 十錢

## 3 大楠公

ああ忠臣大楠公、身は湊川の露と消えても、その日本精神は永遠に日本の礎であります。

定價 壹圓  
送料 十錢

## 4 小楠公

青葉しげれる櫻井の驛で父正成と別れた正行は、やがて又菊水の旗を上げる時が來ました。

定價 壹圓  
送料 十錢

## 5 新田義貞

南朝のために一生をささげた義貞の、忠勇にして悲壯な物語は、大きな感激を與へるでせう。

定價 壹圓  
送料 十錢



小出正吾著(文部省推薦)

## 童話集 白 い 雀

藝術味が豊かで、そして読んで面白いのが小出先生の特徴です。この集は著者の傑作選集です。

A 列二五二頁  
定價 二圓  
送料 十四錢

酒井朝彦著・熊谷元一畫

## 童話集 いたちと子供

木曾の山村に暮す少年を主題にした酒井先生獨特の作品です。熊谷先生の畫と共に貴重な童話集です

A 列三二八頁  
定價 二圓  
送料 十四錢

大木雄二著・大石哲路畫

## 希望の少年 (偉人の生立ち物語)

詩情ゆたかな大木先生の筆で、東西の大偉人の生ひ立ちが、希望と感激に満ちて語られてゐます。

B 列二四八頁  
定價一圓二十錢  
送料 十四錢

水谷まさる著・澤井一三郎畫

## カタ コトリノオウチ

水谷先生の作品の中で、一二年生の讀者が喜ぶ作品を選抜して、この美しい童話集が出来ました。

A 列二一六頁  
定價一圓五十錢  
送料 十四錢

高野てつじ著

## 繪 童話 小さい傳令使

傳書鳩をはじめて飼ふ少年の喜びと、傳書鳩がお國の爲めにどんなに役立つかを書いた繪童話です。

B 列一七〇頁  
定價 一圓  
送料 十錢

武 田 雪 夫

お 母 様 の ば な し

幼児に  
聞かす

お 母 様 の 童 話

B 六型一九六頁  
定 價 九 十 錢 (送料十錢)

(文部省推薦圖書)本書は題名の如く、家庭の母親や保育に従事する人々へ話材を提供する意圖の下に書かれたもので「そのまゝ読んで聞かせることによつてお話としての効果を現す」ところに特色がある。内容は幼児に親しみ深い動物や日常の遊び等に取材し美しい夢を與へ、やさしい心を培ふにふさはしい。…推薦文より…

幼児に  
聞かす

お 母 様 の お 話 集

B 六型一九三頁  
定 價 一 圓 二 十 錢 (送料十錢)

前著「お母様の童話」の姉妹編であつて、「つばめさんのエプロンのお話」以下十六篇のお話を収めました。何の工夫もこらすことなく、ただ靜かに讀んで聞かせになればよろしいのですから、どんなにお話に自信のない方でも、この本によつて樂々とお話が出来ることと信じます。……著者の言葉より……



文 部 省 推 薦 圖 書

島崎藤村著

ひらがな童話集

菊版二〇一頁  
定價一圓(送料十銭)

坪田譲治著

カタカナ童話集

菊版一九三頁  
定價一圓(送料十銭)

徳壽美子著

カタカナ童話集

菊版二〇七頁  
定價一圓(送料十銭)

童話作家  
協會編

銃後童話讀本(軍事保護院推薦)

四六版三〇一頁  
定價一圓(送料十銭)

武田雪夫著

幼兒に  
聞かす

お母様の童話

四六版一九一頁  
定價九十銭(送料十銭)

小出正吾著

童話集

白い雀

菊版二四〇頁  
定價二圓(送料十銭)





17.8.3

952

15

